

戦前の東大哲学科と『哲学雑誌』

東京大学大学院人文社会系研究科
基礎文化研究専攻（哲学）博士課程
笠松 和也

「哲学」という語が philosophy の訳として最初に世に出たのは、1874（明治7）年に刊行された西周『百一新論』とされる¹。「総て簡様なことを参考して心理に徴し天道人道を論明して兼て教の方法を立つるをヒロソヒー訳して哲学と名け西洋にても古くより論のあることとござる」²。『百一新論』下巻の末尾にある有名な一節である。これ以後、「哲学」という訳語は徐々に広まっていったと考えられる。だが、やがて人口に膾炙するようになるのは、もう一つ別の出来事が関わっている。それが1877（明治10）年の東京大学の創設である。当時の東京大学には、法・理・文学部と医学部が設置されたが、そのうち文学部には二つの学科が置かれ、第一学科は「史学、哲学及政治学科」³、第二学科は「和漢文学科」とされた。西周が考案してから10年にも満たない新語が官立大学の学科名に用いられたことは、「哲学」という言葉の普及にとって決定的であった。

本稿では、こうして始まった東大哲学科が戦前にどのように展開されたのか、その概観を描くことを試みる。以下、第1章では、主に講義題目を分析することを通して、戦前の東大哲学科の状況を描き出すことに努める。次いで、第2章では、東大哲学科の学生が中心となって組織した学会「哲学会」の成立事情とその機関誌『哲学雑誌』の理念を明らかにした上で、戦前の『哲学雑誌』の大まかな傾向分析を行う。

第1章 戦前の東大哲学科の状況

創設されたばかりの東京大学は、前身の東京開成学校の宣教師がそのまま教師を務めるなど、まだ学問の教育体制が確立していなかった。最初に哲学関連の講義を行ったのは、イギリス生まれのアメリカの宣教師、エドワード・サイル（Edward Syle, 1817–1890）であったが、当時講義を聴講していた三宅雪嶺の証言によれば⁴、その講義は神学色が強く、学生の

¹ 西周が「哲学」という訳語を用いた例は、1870（明治3）年まで遡ることができる。Cf. 藤田正勝『日本哲学史』昭和堂、2018年、40頁。

² 西周『百一新論』下巻、1874年、35丁表–裏。

³ 第一学科は1879（明治12）年9月には「史学」が削られ、「理財学（経済学）」が加えられて、「哲学、政治学、理財学科」に改められる。さらに1881（明治14）年9月には「哲学科」と「政治学及理財学科」の二つの学科に分かれることになる。

⁴ 三宅雪嶺「明治哲学界の回顧 付記」『岩波講座哲学 第11』岩波書店、1932–1933年、92頁。

関心をあまり引かなかったようである。のちに同じく聴講者であった井上哲次郎が言うように、所詮「間に合せの教師で大学の教師としてはいかにも不適任」⁵であった。本格的な哲学の講義が始まるのは、東京大学創設翌年のフェノロサ着任以降である。

1. 外国人教師の時代

アーネスト・フェノロサ (Ernest Fenollosa, 1853–1908) は、ハーバード大学で哲学を修めた人物で、その頃東京大学の教師だった動物学者のエドワード・モースの推薦により、1878 (明治 11) 年 8 月に来日し、翌 9 月から東京大学で哲学、政治学、理財学 (経済学) を講じるようになった。当時はまだ 25 歳の若者であり、井上哲次郎の回想によれば、若く澆刺とした様子だったようである⁶。ハーバード大学では当時流行していたスペンサー哲学に傾倒していたこともあり、東京大学での近世哲学の講義⁷ではミルの功利主義やスペンサーの進化論哲学を紹介した上で、スペンサー哲学とヘーゲル哲学の総合を論じた。

その一方で、近代哲学史の講義では、シュヴェーグラー『哲学史』英訳やボーウェン『近代哲学』を参考にしながら、デカルトからスペンサーに至る近代哲学史を解説した。また、ドイツ哲学に関しては、カントはエドワード・ケアード (Edward Caird)、ヘーゲルはウィリアム・ウォーレス (William Wallace) の研究書に依拠していた。ケアードとウォーレスは 19 世紀後半に活躍したイギリス理想主義を代表する人物で、その著書はイギリスとアメリカでよく読まれていた。特に、ウォーレスによるヘーゲル『小論理学』英訳⁸は、1870 年代以

⁵ 井上哲次郎『懐旧録』春秋社松柏館、1943 年、199–200 頁。

⁶ 同上、200 頁、293 頁。なお、井上は着任時のフェノロサの年齢を「二十六歳」としているが、数え年によるものであろう。

⁷ 1880 (明治 13) 年以降の哲学科の授業構成は、『東京大学法理文三学部一覽』の「教科細目」から復元できる。まず、1880 (明治 13) 年 9 月に始まる学年は、1 年次は「論理学」、2 年次は「心理学」、3 年次は「近代の心理学と道義学」、4 年次は甲乙の二つに分かれ、甲は「心理学及び近世哲学」、乙は「近世哲学史」が課された。1881 (明治 14) 年 9 月に始まる学年は、1 年次は「論理学」、2 年次は「心理学」「哲学史」「世態学 (社会学)」、3 年次は「近世哲学」「印度及支那哲学」、4 年次は「心理学」「道義学及審美学」「印度及支那哲学」が課された。1882 (明治 15) 年 9 月に始まる学年は、1 年次は「論理学」、2 年次以降は東洋哲学と西洋哲学の授業があり、東洋哲学の方は、2 年次は「東洋哲学史」、3 年次・4 年次は「印度及支那哲学」が課され、西洋哲学の方は、2 年次は「心理学」「西洋哲学史」「世態学 (社会学)」、3 年次は「近世哲学」、4 年次は「心理学」「道義学及審美学」が課された。1883 (明治 16) 年 9 月に始まる学年は、前学年と同様であった。こうした授業構成には、少なくとも次の三つの特徴が見られる。(a) 論理学の授業があらゆる学問の基礎として位置づけられ、法・理・文学部ともに 1 年次に履修するように求められた。(b) 心理学を学ぶことが哲学の基礎と考えられた。(c) 1881 (明治 14) 年以降は、西洋哲学、東洋哲学ともに、哲学史を学んでから個々の哲学へと進むという授業構成になった。なお、ここでいう「近世哲学」は、Early Modern Philosophy の訳ではなく、Modern Philosophy の訳であるため、現在の「近代哲学」という言葉に当たる。

⁸ William Wallace, *The Logic of Hegel*, Oxford: Clarendon Press, 1873. 同書はウォーレスによる長大

降の英米圏のヘーゲル受容を方向づけたものである。フェノロサが講義で用いていたのは、まさにこの英訳であった。

興味深いことに、フェノロサの講義を受けた井上哲次郎、井上円了、三宅雪嶺、清沢満之らの世代は、いずれも若い頃にシュヴェーグラーやボーウェン、ルイス、ユーベルヴェークの哲学史の本（またはその英訳）を繙きながら、自ら西洋哲学史を描いている⁹。フェノロサによる近代哲学史の講義は、「西洋哲学史を学ぶ」という伝統を日本に根付かせた点で、重要な役割を果たしたと言えよう。

しかし、井上哲次郎らは次第にフェノロサに物足りなさを感じるようになる。要因の一つには、フェノロサの関心が進化論哲学に向いていたのに対して、井上らは西洋哲学史を学ぶ中でより形而上学的な原理を希求するようになったことが挙げられる¹⁰。また、フェノロサはドイツ語ができなかったため、用いた哲学書が専ら英書か英訳であったことや、フェノロサ自身いずれドイツに留学したい旨を学生にこぼしていた¹¹ことも、物足りなさを感じた理由の一つであろう。フェノロサ在任中はこの物足りなさは解消されなかったようである。

そのほか、特に学生の印象に残った講義としては、スペンサーやアレクサンダー・バインをもとにした外山正一による心理学や社会学の講義や、原坦山による『大乘起信論』の講義、中村敬宇による漢学の講義、横山由清による国学の講義があった。また、1883（明治16）年には、東京大学文学部を卒業したばかりの井上哲次郎が「東洋哲学史」の講義を担当し、支那哲学を講じた¹²。井上円了、三宅雪嶺、清沢満之らがこの講義を聴いている。

なプロレゴメナの後に、『エンチュクロペディ』中の『論理学』（いわゆる『小論理学』）の英訳を付けたもので、英米圏でヘーゲル論理学への関心が高まるきっかけとなった。プロレゴメナには、スペンサーやダーウィンへの言及もあり、1860–70年代の進化論哲学の流行の影響が見られる。

⁹ 井上哲次郎講述『西洋哲学講義』巻之一～四、1883年。井上円了『哲学要領 前編』哲学書院、1887年。三宅雪嶺『哲学涓滴』文海堂、1889年。三宅雪嶺講述『希臘哲学史』哲学館、1899年。三宅雪嶺講述『近世哲学史』哲学館、1900年。清沢満之講述「西洋哲学史講義」（1889–1894年の真宗大学寮での講義ノート、『清沢満之全集』第5巻（岩波書店、2003年）に所収）。

¹⁰ Cf. 「[...] ダーキン主義の進化論だの、スペンサーの説き出した進化主義の哲学などによって哲学的疑惑を解決することは出来なかった。も一つそれより深い形而上学的の哲学を求むるの念が旺盛であった」（井上哲次郎『懐旧録』、202頁）。

¹¹ 三宅雪嶺『大学今昔譚』、36頁。および「明治哲学界の回顧 付記」、91頁。

¹² この講義を記録したノートは最近発見され、以下の論文で翻刻されている。Cf. 水野博太「高嶺三吉遺稿」中の井上哲次郎「東洋哲学史」講義『東京大学史紀要』第36号、2018年。なお、講義が行われた年度に関して、井上哲次郎自身が書いた『異軒年譜』によれば、1883（明治16）年9月に「始めて東洋哲学史の講義を開く」とあるが、井上円了の聴講ノートでは1882（明治15）年末～1883（明治16）年7月にかけて「東洋哲学史」講義の記録が見られるという食い違いがある。これについては、水野が前掲論文で、「東洋哲学史」講義は1882（明治15）年末～1883（明治16）年7月と1883（明治16）年9月～1884（明治17）年7月の2年間にわたって開講された可能性を指摘している。

外国人教師としては、フェノロサの他にも、1879（明治12）年4月にイギリス人教師のチャールズ・ジェイムズ・クーパーが着任し、哲学史やカント哲学の講義をしたようであるが、1881（明治14）年7月に退任している。1886（明治19）年8月のフェノロサの退任後は、同年9月～12月にアメリカ人教師のジョージ・ウィリアム・ノックスが哲学と審美学（美学）を担当した。いずれも短期間であったためか、ほとんど記録が残っていない。

ノックスの後任となったのは、ドイツの若い哲学者ルートヴィヒ・ブッセ（Ludwig Busse, 1862–1907）であった。ブッセは1887年1月に帝国大学文科大学の教師に着任し、1892年12月の退任までの約6年間にわたり、カント以降のドイツ哲学を講じた。講義ではヘルマン・ロツツェの哲学を解説することが多かったが、これは英米圏のドイツ哲学受容とは異なる潮流を導入したという点で大きな意義がある。特に、ブッセの学生時代は、ドイツでロツツェの哲学が忘れ去られる直前の時期に当たる。そのため、ブッセはぎりぎり19世紀前半におけるロツツェの哲学を踏まえたドイツ哲学の導入を行うことができた。これは、のちに日本に紹介される新カント派の哲学を受け入れる素地を作ることにもなった。大西祝から西田幾多郎までの世代が、ブッセの講義から学んだ。

2. 井上・ケーベル体制

1883（明治16）年に東洋哲学史を講じた井上哲次郎は、翌1884（明治17）年からドイツに留学する。1890（明治23）年に帰国するまで、哲学の講義はノックスとその後任のブッセ一人が担当していた。井上は帰国後すぐに帝国大学文科大学教授に着任し、日本人初の哲学科教授となる。これ以降、1892（明治25）年12月まで井上・ブッセ体制が続く。西田幾多郎が選科生として在学していたのは、まさにこの頃である。ブッセが退任すると、その翌年の1893（明治26）年6月には、ドイツ系ロシア人哲学者のラファエル・フォン・ケーベルが着任する。これにより、以後21年間にわたる井上・ケーベル体制が始まる。

井上は着任後、仏教を中心とした比較宗教論、六派哲学から初期仏教に至る東洋哲学史、カントやショーペンハウアーに重点を置いた西洋哲学史を講じたが、次第に外国人教師との役割分担を強く意識するようになる。当時の学生がブッセやケーベルの教えを受けて、ドイツ哲学に傾倒するのを見て、井上自身はバランスをとってむしろ東洋哲学の講義に力点を置くべきだと考えたようである¹³。実際、講義題目が判明している1895（明治28）年以降は、主に井上が純正哲学、実践哲学、東洋哲学史を担当し、ケーベルが哲学概論、西洋哲学史、哲学演習を担当している。

井上の東洋哲学史講義は、1890（明治23）年度の講義開始から約30年の間に、印度哲学（六派哲学から釈迦伝まで）、陽明学派、古学派、朱子学派、武士道、国民道徳論を順に扱った¹⁴。これらの講義は、印度哲学については『釈迦牟尼伝』（1902年）、儒学については『日

¹³ Cf. 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」『岩波講座哲学 第11』岩波書店、1932–1933年、8–9頁。

¹⁴ 印度哲学の講義のうち、1893（明治26）・1894（明治27）年度に行われた六派哲学に関する講義については、姉崎正治による講義ノートが残っており、以下で翻刻されている。Cf. 磯前順一・

本陽明学派之哲学』(1900年)、『日本古学派之哲学』(1902年)、『日本朱子学派之哲学』(1906年)の三部作、国民道徳に関しては『国民道徳概論』(1912年)に結実する。その一方で、純正哲学の講義では、「現象即実在論」という自身の学説を講義した。井上の構想では、純正哲学、理論哲学、実践哲学、宗教哲学という順で発展するものだったようである¹⁵。

こうした講義は長年にわたり哲学科の必修科目であったため、基本的にすべての学生が受講することになった。とりわけ東洋哲学史に関しては、多くの証言が残っている。以下、代表的なものをいくつか拾い出してみたい。

まず、西田幾多郎の証言である。西田は選科生の頃、井上の印度哲学の講義を聴いている。「講義はいつでも午後の三時からという風で先生が襟巻をして、ステッキを持って、校門を入れて来られた姿は、今も尚眼前に見ることが出来る様な気がする」¹⁶。講義の内容そのものには触れていないが、「先生の印度哲学の講義は長く保存して居た」¹⁷と述べるなど、いちおうは肯定的な評価を与えている。また、同じく印度哲学の講義を聴いた姉崎正治は、その講義で初めて印度哲学の概要を知り、のちにインド宗教史を自らの研究対象とすることになる¹⁸。これについては、井上自身も「殊に比較宗教学の立場から仏教を講ずることは、姉崎正治博士に譲った」¹⁹と述べている。

ところが、これより下の世代になると、厳しい評価が目立つようになる。例えば、武士道の講義を受けた安倍能成は、次のように回顧している。「井上教授の「日本武士道の哲学」というのが、必修の講義だったが、これが実に無準備な出鱈目の粗笨極まる講義であった。例えば武士道の根源を大伴家持の「海ゆかばみづく屍、山ゆかば草むす屍、大君のへにこそしなめ……」の長歌に求めたのはよいとしても、どうも大伴の家持はこの長歌の外に、「万葉集」にはあまり歌はない、どうも調べて見たが見つからない、というような好い加減なことをいい、又代々皇太子に伝える壺切の剣を、源氏伝家の「髻切の剣」と取り換えたりする有様であった」²⁰。安倍による評価は、「この哲学のての字もない人が、スエズ以東第一の哲学者といわれ、その現象即実在論が彼の独創だという者があったのだから、あきれる外はない」²¹と手厳しいものであった。

また、日本道徳史の講義を受けた出隆によれば、講義はまず『魏志倭人伝』における卑弥呼の記述から始まり、脱線を繰り返しつつ、日本民族と朝鮮民族の風習比較論に移り、天孫

高橋原「井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」講義一解説と翻刻一」『東京大学史紀要』第21号、2003年。

¹⁵ これは「明治哲学界の回顧」の結論部の構成とも大まかに対応する。

¹⁶ 西田幾多郎「井上先生」『井上先生喜寿記念文集』巽軒会編、富山房、1931年、660頁。

¹⁷ 同上。

¹⁸ Cf. 姉崎正治『わが生涯』姉崎正治先生生誕百年記念会編、1974年、55-60頁。

¹⁹ 井上哲次郎『井上哲次郎自伝』富山房、1973年、45頁。

²⁰ 安倍能成『我が生ひ立ち』岩波書店、1966年、409-410頁。

²¹ 同上、410頁。

降臨、仏教渡来を話したところで学年末になり、最後の2時間の講義で「奈良時代から幕末までの仏教、儒教、国学の学者たちの名前と系譜をボードいっぱい書いては消してまた書きつづけ、そして「砲声一発、浦賀湾頭に轟ろいて」明治維新、文明開化の時代となり、云々、といった調子」²²で終わるもので、明らかに準備不足の観があった。さらに、講義の仕方についても、厳密な考証はなく、知識の羅列に終始することが多かった。「管仲が水を万物の母と言ったから唯物論だ、こう書いてるから合理論だ、この点では重農主義、あの点では重商主義、等々といったような粗雑な講義」²³であった。

このように、井上の東洋哲学史講義は、旧制高等学校や旧制高等学校を卒業し、初めから西洋哲学に関心をもって入学してきた学生にとっては、大雑把で深みのない授業に映ったようである²⁴。

これに対して、ケーベルの講義は、学生の人気が非常に高かった。講義には、初学者向けの哲学概論のほか、古代から近代までの西洋哲学史、カントやヘーゲル、ショーペンハウアーの講読、ギリシア・ローマ古典文学、ドイツ文学などがあったほか、課外で長年古典ギリシア語を教えた。講義の様子はさまざまな人物が証言しているが、例えば出隆は退任直前の

²² 出隆『出隆著作集 第7巻 出隆自伝』勁草書房、1963年、82頁。

²³ 同上。

²⁴ 井上が学生指導の際に、見当外れなことを言うことが多かったことも、こうした厳しい評価に拍車をかけることになった。例えば、和辻哲郎がキルケゴール『人生行路の諸段階』を井上に借りに行った際、井上が同書をキルケゴール研究の論文集と勘違いし、講釈を垂れたエピソードは有名である。和辻はこれを『ゼエレン・キルケゴール』新版序で明かしている。また、出隆は卒論をめぐる井上の発言を次のように回想している。「卒論の題をきめる会合のとき、僕がスピノザの哲学をやりたいと言ったら、「では、ぜひスピノザ哲学とバーダント哲学との比較研究を」と言われ、スピノザの認識論に限りたいと答えたら、さらに「それでは、唯識哲学も忘れないで参考して」と言われて、こまった大風呂敷の先生だなあと思いながら、僕は、サンスクリットが読めませんから卒論にはまに合いません、と言ってその場をのがれた。そういうわけで、この老先生には愛想をつかしていた」（出隆『出隆自伝』、129-130頁）。同様の感想は卒論の口頭試問でも抱いたようである。「[...] 試験に立会ったのは哲学科の教授二人、井上先生と桑木先生だけで、その二人の前に一人ずつすわって質問に答えるのだった。[...] だいたい井上さんは哲学的常識(?)一般についてたずね、桑木さんはもっぱら卒業論文に関する質問をされた。井上さんからは管仲とターレスとのどちらが年上か、またこの二人の学説の異同は?と問われたのを覚えている」（同上、115-116頁）。こうした状況を、安倍は次のように手厳しく批判している。「京都大学は後に西田幾多郎博士と田辺元博士とを得て、独特な学風を發揮した。西田さんも田辺君も、哲学を「真」の追究を、自分の生命とする真剣な学徒であった。井上博士によって創められた東大文学部の哲学科が、京都大学に比して萎靡不振を極めた原因は、井上さんが哲学者でも学者でもなく、又真面目な人間生活の追究者でも何でもなかったのに基づく。[...] 井上氏の如き自己の無知を恥じず、真を追究する志がなくして、ただ年少時代の才気と粗笨な博学とによって、文学部の長老を惰性的に続けることを許したのは、たしかに東大文学部の屈辱といわなければならない」（安倍能成『我が生ひ立ち』、411頁）。

ケーベルの哲学概論を次のように回想している。「『哲学へのイントロダクション』というのだが、内容はギリシャ哲学からベルグソンまでの哲学史概説だった。ルーズ・リーフに英文で書かれた古ぼけたノートをドイツ語なまりの妙な発音で読んでいかれるので、僕らのノートには、ときどきボードに書かれるラテン語やギリシャ語の術語や人名しか書き取られなかった。机に左のひじをついて、ときおりその指さきを額から頭にやられる。白い髪の毛は、指でおさえられるがままの形にじいっとおさまる。なんだか髪の毛までもが意のままになる老境の聖者という感じだった」²⁵。もっとも、安倍能成の証言によれば、学生は講義の内容そのものよりも、ケーベルの教養の深さや人格の高潔さに魅了されたようである²⁶。ケーベルが着任したのは桑木巖翼が入学した年であったので、ケーベルの影響は桑木の世代から出隆の世代まで及んだことになる。

ケーベルの功績の一つは、古典重視の学風を東大哲学科に根付かせた点にある。これはケーベルが自覚的に行ったことであった。この点については、西田幾多郎による証言が残っている。「ケーベルさんは始めて日本へ来て、日本の学生が古典語を知らないで哲学を学ぶということが、如何にも浅薄に感ぜられたらしい。私が或日先生を訪問してアウグスチヌスの近代語訳がないかとお聞きしたところ、先生はお前はなぜ古典語を学ばないかといわれた。私は日本人として古典語を学ぶのは中々困難であると申上げると、それでもお前と同クラスの岩元君はギリシャ語を読むではないかとのことであった。You must read Latin at least.といわれた」²⁷。こうした古典重視の学風は、着実に学生に受け継がれた。例えば、ケーベルの薫陶を受けた波多野精一は、のちに西洋哲学史を講じる際には、できるかぎり原典に当たっていた。また、少なくとも大正期には、既に「卒論を書く際には原書に当たる」という規定があった²⁸。

その他の哲学関連の講義としては、中島力造、元良勇次郎、波多野精一、小林一郎の講義があった。中島力造は1892（明治25）年に倫理学の教授に着任して以来27年にわたって、古代から近代までの西洋倫理学史や国民理想比較研究を講じ、演習ではカント、ヘーゲル、シジウィックの講読を行った。西洋倫理学史では、とりわけイギリス功利主義のベンサムやミル、イギリス理想主義のトマス・ヒル・グリーンを紹介した。博覧強記の勉強家であり、講義の際には毛筆の簡単なメモのみを用意し、そのメモに沿って話した²⁹。なお、中島自身はドイツ語が苦手であったため、カントやヘーゲルの講読には専ら英訳を用いた。

²⁵ 出隆『出隆自伝』、75-76頁。

²⁶ 安倍能成『我が生ひ立ち』、406-407頁。

²⁷ 『西田幾多郎全集 第10巻』竹田篤司ほか編、岩波書店、2004年、410-410頁。

²⁸ 出隆『出隆自伝』、98-99頁。

²⁹ 「講義用のメモは、厚ぼったい和紙の判取帳みたいな本で、それに毛筆で、墨の太い字で綱目だけ、たとえば「ベンサム・功利説、その要点、一、二、三、その批判、一、二、三、」と書いてある。そうした簡単なメモで、じゅんじゅんと、ゆっくり西洋の古来の倫理思想を講義される」（同上、88頁）。

また、中島の盟友であった元良勇次郎も 1890（明治 23）年に心理学の教授に着任し、それ以来 23 年間、ヘルムホルツの生理学、フェヒナーの精神物理学、ヴィルヘルム・ヴントの実験心理学、ウィリアム・ジェームズの心理学、そして社会心理学を講じた。演習ではヴントやジェームズの講読を行った。講義に関しては、安倍能成が次のように記憶している。

「元良先生の講義で覚えて居るのは、空間感覚が人間の抵抗感覚によって生ずる、と説かれたように印象した一節と、今一つはバイブルの中にキリストの言葉の、「我は道なり真理なり」とかあった詞を解して、真理を社会の要求を充たすものと解せられたことである」³⁰。

一方、早稲田大学教授であった波多野精一は、1907（明治 40）年度から 7 年間、宗教学の講師として宗教学演習を担当し、カントやオイケンの講読を行った。また、姉崎正治がフランスに出張した際には、「基督教の起源」と題した講義を行い、原始キリスト教史を解説した。ちょうどこの講義を聴いた安倍能成は、波多野を次のように評価している。「東大の講義の中で、これこそ大学の講義というものだろうと思ったのは、波多野精一博士の「原始基督教史」であった。[...]「原始基督教」の講義は波多野さん自身にも緊張が見え、措辞も精確且つブリリアントであり、六尺に近い長軀の波多野さんは、時々鼻をクンクンとつまらせはしたが、弁舌としても無駄のない、充実した堂々たるものであり、私達聴講者は全くそれに魅せられてしまった」³¹。波多野はその後、ケーベルの後を継いで、1914（大正 3）年度から 4 年間、哲学科でギリシア哲学史、中世哲学史を教えることになる。

小林一郎は 1906（明治 39）年度から 5 年間、哲学の講師として論理学と認識論を講じたが、大正期になると今福忍がその後を受け継いだ。

3. 井上・桑木体制

1914（大正 3）年 7 月にケーベルが退任すると、同月に桑木巖翼が東京帝国大学文科大学教授に着任する。これ以降、1923（大正 12）年 3 月の井上哲次郎退任までの 8 年半、哲学科は井上・桑木体制が続く。

井上哲次郎はこの時期、哲学概論と東洋哲学史を担当し、主に国民道徳論を論じていたが、桑木は着任時から井上の雑駁な東西比較を嫌っていたようである。桑木としては、哲学概論は西洋哲学を中心に据えたものにしたかったが、それが実現するのは井上の退任を待たなければならなかった³²。

桑木は 1935（昭和 10）年の定年退官まで 20 年半にわたり教鞭を執るが、1923（大正 12）年 3 月までは、西洋哲学史概説、特殊講義、哲学演習を担当した。当時の講義を聴いていた出隆の証言によれば³³、西洋哲学史概説は主にヴィンデルバントの教科書³⁴に沿ったもので、

³⁰ 安倍能成『我が生ひ立ち』、416 頁。

³¹ 同上、412-413 頁。

³² Cf. 出隆『出隆自伝』、78-79 頁。

³³ 同上、79 頁。

³⁴ Wilhelm Windelband, *Lehrbuch der Geschichte der Philosophie*, 3. Aufl., Tübingen: J.C.B. Mohr, 1903.

毎週 4 時間の講義で古代から現代までを万遍なく扱った。講義ノートは京都帝国大学時代のものを使っていたようである。また、特殊講義では、「カントからフィヒテまで」「フィヒテの知識学序説の解説」「十九世紀の哲学」といった題で、カントからヤコービ、ハーマン、ラインホルトを経てフィヒテまでを紹介する一方で、ヘーゲル以降の 19 世紀哲学、とりわけ心理主義と論理主義の論争、実証哲学と経験批判論の解説を行った。演習では、第一次世界大戦の影響でテキストが入手しづらかったため、レクラム版のカント『純粹理性批判』を 3 年間続けて読んだほか、ヘーゲルの講読も行った。

のちに日本を代表する教育家となる大島正徳も、同じ時期に東京帝国大学文科大学講師を経て、助教授に就任している。大島は 1912（大正元）年度から英米哲学の講義や哲学演習を担当したが、講義ではイギリス経験論とプラグマティズムを紹介し、演習ではロック、バークリー、ヒューム、ベルクソン、ジェームズ、デューイなどを講読した。

さらに、この頃には講師の陣容も固まり、今福忍、紀平正美、得能文が例年講義を担当するようになる。今福忍は、当時 360 頁超の『最新論理学要義』（1908 年）の著者として知られた論理学者で、1911（明治 44）年度から同書をもとに形式論理学の講義をしたほか、ドイツの最新の論理学も紹介した。出隆の世代は、今福から形式論理学を叩きこまれている³⁵。ところが、今福は 1923（大正 12）年 9 月の関東大震災で家屋倒壊に巻き込まれて死亡してしまう。この後継を務めたのが、慶應義塾大学教授だった伊藤吉之助である³⁶。

紀平正美は、のちに国民精神文化研究所での活動で有名になる人物で、戦時中には『皇国史観』（1943 年）という悪名高い著書を刊行するが、この時期はまだ気鋭のヘーゲル学者であった。紀平は日本で初めてヘーゲルをドイツ語原文で読んだ世代に属し、大正期から昭和前期にかけてのヘーゲル受容に大きな影響を与えた。1911（明治 44）年度から続いた講義は、「認識論」や「範疇論」と題されていたが、これはのちに岩波書店から『哲学叢書』の一冊として刊行される『認識論』（1915 年）³⁷に結実する。また、1920（大正 9）年頃には、『行の哲学』（1923 年）の一部を講義していた。紀平自身は眼光が鋭く、弁舌が達者な人物だったようである³⁸。

得能文は、石川県専門学校（のちの第四高等学校）で西田幾多郎と同期生で、西田とともに放校処分になり、ともに東大哲学科の選科生になった人物であるが、1915（大正 4）年度

桑木は本書初版を抄訳し、『哲学史要』（早稲田大学出版部、1902 年）として出版していた。

³⁵ Cf. 同上、86 頁。

³⁶ 当時高等学校で哲学概論や論理学を教えるためには、大学で「論理学」の単位を取る必要があった。1924（大正 13）年度以降は、伊藤吉之助の特殊講義の単位が「論理学」の単位に代わるものとして認定されるようになった。Cf. 同上、282 頁。

³⁷ 三木清は「読書遍歴」の中で、第一高等学校在学中に繰り返し読んだ哲学書として、宮本和吉『哲学概論』や速水滉『論理学』とともに、紀平正美『認識論』を挙げている（『三木清全集 第 1 巻』岩波書店、1966 年、393 頁）。

³⁸ Cf. 紀平正美『哲学早わかり』（帝国教育会出版部、1929 年）巻頭「著者の小伝」。

から現代哲学の講義を担当している。講義で扱った範囲は広く、オイケン、バルクソン、ディルタイに始まり、新カント派の西南学派（ヴィンデルバント、リッケルト、ラスク）、マールブルク学派（コーエン、ナトルプ、カッシーラー）、ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、リップス、マイノング、ウィリアム・ジェームズ、サンタヤーナ、新实在論、ラッセル、クローチェ、ニコライ・ハルトマンと多岐に及んだ。とりわけフッサール現象学の最初期の紹介者としての役割は重要である。概ねそれぞれの著作の梗概を紹介する講義だったようである³⁹。

また、ケーベル退任後のギリシア哲学史・中世哲学史は、それまで宗教学の講師だった波多野精一が1914（大正3）年に哲学の講師となって引き継いだ。その最初の3年間の講義を聴いた出隆によれば⁴⁰、1914（大正3）年度はタレスからデモクリトスまでの初期ギリシア哲学、1915（大正4）年度はソフィストやソクラテスからアリストテレスまで（とりわけプラトン）、1916（大正5）年度には「中世哲学」という名目で、実際は古代末期の宗教哲学、具体的にはフィロン、プルタルコス、新ピュタゴラス派、プロティノスなどを扱った。出隆は特に2年目のプラトンの講義が印象に残ったようで、その講義ではプラトン対話篇の真偽問題や成立年代順の問題、イデア説の変遷などが講じられたのを聴いている。波多野は哲学史を講じる際、基本的にはすべて原典に当たって確認していたが、3年目の古代末期の講義に関しては、ツェラーの哲学史を種本にしていたようである。いずれの講義も、完全に推敲済みの講義ノートを調子の高い説教口調で読み上げるものだった。

なお、波多野が哲学史を担当したのは1917（大正6）年度までで、翌1918（大正7）年度からは石原謙が引き継ぎ、ギリシア哲学史を講じている。また、石原のドイツ留学中に当たる1921（大正10）・1922（大正11）年度には、鹿子木員信がギリシア哲学史とプラトン哲学の講義を行い、プラトン『ソクラテスの弁明』の講読をしている。

4. 桑木・伊藤・出体制

井上哲次郎が1923（大正12）年3月に退官すると、哲学科の教授は桑木巖翼一人になった。もともと哲学科には講座が二つあり、哲学哲学史第一講座（哲学概論）を井上、哲学哲学史第二講座（西洋哲学史）を桑木が担当していたが、井上の退官とともに桑木が第一講座に移り、第二講座は伊藤吉之助と石原謙が分担した。桑木としては、第二講座を二つに分割し、新たに第三講座を設け、第二講座を近世哲学史、第三講座を古代・中世哲学史という分担にした上で、第三講座に石原を充てる算段だったようである。ところが、この第三講座が実現しなかったばかりか、石原自身が同じケーベル門下であった小山鞆絵や阿部次郎に誘われて、東北帝国大学法文学部の哲学第二講座に移ってしまう。これにより、桑木の目論見は崩れることになった⁴¹。

³⁹ 出隆『出隆自伝』、90-92頁。

⁴⁰ 同上、94-96頁。

⁴¹ 同上、284-285頁。

一方、1915（大正4）年度の途中から助教授を務めていた大島正徳は、1925（大正14）年4月に東京市学務局（のちの教育局）長に就任し、同年9月24日付で哲学科教授に昇任するものの、翌25日に「依願免本官」の扱いで退官する。これ以降は、講師として1940（昭和15）年度まで哲学科の授業を担当することになる。

こうした結果、助教授のポストは、石原の後を出隆が継ぎ、大島の後を伊藤吉之助が継ぐことになった。これにより、桑木・伊藤・出体制が確立する。

桑木は1925（大正14）年度から西洋哲学史概説を二つに分割し、第一部の古代・中世哲学史は出に任せ、第二部の近世哲学史のみ自身が担当するようになる。ほかには哲学概論、特殊講義、哲学演習を受け持った。特殊講義ではフィヒテからヘーゲル以後までの19世紀ドイツ哲学を講じ、哲学演習ではカント『純粹理性批判』、『判断力批判』、ヘーゲル『エンチクロペディ』を講読した。

伊藤は1923（大正12）年度から講師として、新カント派や独逸学派（ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、マイノングラ）を紹介していたが、1926（大正15）年に助教授になると、桑木が受け持っていた哲学概論や西洋哲学史概説第二部をそれぞれ桑木と交互に担当するようになる。さらに1930（昭和5）年には教授に昇進している。特殊講義では引き続き現代哲学を講義し、哲学演習ではカント『純粹理性批判』やロツツェ『論理学』、ラスク『判断論』のほか、フッサール『イデーニ I』、ハイデガー『存在と時間』、『カントと形而上学の問題』、ヤスパース『現代の精神的状況』等を講読した。のちに山崎正一や今道友信が証言するところによれば、伊藤の哲学演習は、担当の学生を教壇に立たせて報告させた上で、伊藤がそれに対して強い口調で質問を浴びせかけ徹底的に吟味するという厳しい内容だったようである⁴²。

出は1924（大正13）年に石原謙の後を受けて哲学科助教授になり、桑木から託された西洋哲学史概説第一部を講じるようになる。だが、哲学演習に関しては、もともとスピノザを専攻していたこともあり、初めの演習はスピノザ『エチカ』の講読をしている。ところが、オクスフォード大学への留学から帰国すると、特殊講義と哲学演習は古代・中世哲学に特化するようになる。特殊講義では留学中に取り入れたバーネットやテイラーの研究を精力的に紹介する一方で、9-12世紀の中世哲学を講じた。哲学演習ではアリストテレス『デ・アニマ』、『ニコマコス倫理学』、『形而上学』、『自然学』を次々と取り上げている。

講師に関しては、1927（昭和2）年度から紀平・大島の2人体制になる。この間、紀平は1928（昭和3）年度から3年間、ヘーゲル『精神現象学』の講義をし、その後は一般論理学を講じている。大島は英米哲学の講義と哲学演習を担当し、哲学演習ではロック『人間知性論』、パークリー『人知原理論』、ヒューム『人間知性研究』、ミル『論理学体系』といった古典に加えて、新實在論やサンタヤーナの著作を取り上げる年度もあった。

⁴²『山崎正一全集 第10巻』朝日出版社、1985年、330-332頁。および今道友信『断章 空気への手紙』ティビーエス・ブリタニカ、1983年、82-88頁。なお、演習の際に学生に報告させて教員が論評するという形式自体は、実はケーベルも3年次向けの哲学演習で行っていた。

5. 伊藤・出・池上体制

1935（昭和10）年3月に桑木が定年退官すると、同4月に出が教授に昇進する。また、同年に講師に就任した池上鎌三が、翌1936（昭和11）年3月に助教授になる。これにより、哲学科は伊藤・出・池上体制に替わる。必修授業の分担に関しては、伊藤が哲学概論、出が西洋哲学史概説第一部、池上が西洋哲学史概説第二部を担当するようになる。

伊藤は特殊講義でこれまで主に新カント派以降の哲学を講じてきたが、桑木の退任後は時代を少し遡り、ヘーゲル以降の19世紀哲学を扱うようになる。哲学演習でもヤスパース『理性と実存』のほかは、フィヒテ『人間の使命』、シェリング『ブルーノ』、ヘーゲル『精神現象学』、『大論理学』といった19世紀の古典を取り上げている。

出の特殊講義は、プラトン、アリストテレス、古代末期、アウグスティヌス、中世哲学を扱ったほか、1940（昭和15）年度からは「コスモポリテスの哲学」を講じている。哲学演習では、引き続きアリストテレスの著作（『形而上学』『オルガノン』『デ・アニマ』）を講読したほか、プラトンの著作（『ティマイオス』『国家』）の講読も始めている。

池上は特殊講義では論理学、文化哲学、知識論を講じた。それぞれ『論理学』（1934年）、『文化哲学基礎論』（1939年）、『知識哲学原理』（1946年）に即した内容だったと思われる。哲学演習では初めの2年間はそれぞれフッサール『イデーニ I』とヤスパース『デカルトと哲学』を扱ったが、その後はカント『純粹理性批判』やカント解釈論文の講読に切り替えている。

講師としては、大島正徳、金子武蔵、桂寿一、石原謙、武田信一が講義を受け持った。大島は桑木在任中から引き続き1940（昭和15）年度まで、英米哲学の講義と哲学演習を担当し続けた。この頃の演習では、ロック『人間知性論』、バークリー『人知原理論』のほか、ウィリアム・ジェームズ『根本的経験論』等、現代アメリカ哲学の著作を取り上げた。金子は1935（昭和10）年度から3年間、それぞれ「時間の問題」「人間学の問題」「ロゴスの問題」と題した特殊講義をした後、1938（昭和13）年度に倫理学科に移り、助教授になった⁴³。桂は1940（昭和15）年度から、デカルトとデカルト主義の講義をしている。これは『デカルト哲学研究』（1944年）と『デカルト哲学の発展』（1948年）に結実するものである。石原は1940（昭和15）年に東京女子大学学長に就任し、仙台から東京に拠点を移すが、それに伴って翌1941（昭和16）年に東大哲学科でアウグスティヌスの講義をしている。この講義はおそらく1942（昭和17）年10月から武田信一が引き継いでいる⁴⁴。

以上が1942（昭和17）年度までの状況である。翌1943（昭和18）年度以降は公的な記録が途切れているため、講義の状況がよく分からない。だが、1945（昭和20）年度に関して

⁴³ 金子は助教授就任後の最初の2年間、なぜかアリストテレスを英訳で講読する演習を行っている。最初の年は『ニコマコス倫理学』をロスの英訳で読み、次の年は『政治学』をジョウエットの英訳で読んだようである。その後、和辻からヘーゲル『法の哲学』の講読を引き継いでいる。

⁴⁴ 『石原謙著作集 第11巻』巻末の年譜によれば、石原は1942（昭和17）年9月まで講師として授業を担当している。

は、同年度に入学した今道友信の証言から次のように再構成できる⁴⁵。

哲学哲学史第一講座（古代・中世哲学史）は出、哲学哲学史第二講座（近世・現代哲学史）は伊藤と池上が分担した。講師には、武田信一（西洋中世哲学史）と山崎正一（西洋近世哲学史）がいた。出の演習は「プラトン原典研究」、伊藤の演習はヘーゲル『歴史哲学』緒論講読、池上の演習はカント『純粹理性批判』講読だった。また、武田はグループマン『中世哲学史』を講読していた。助手は寺沢恒信、副手は斎藤忍随で、大学院には末木剛博がいた。他方、倫理学第一講座（倫理学・西洋倫理学史）は和辻と金子が分担し、和辻が西洋現代倫理学、金子が西洋古代倫理学を受け持った。倫理学第二講座（倫理学・日本倫理学史）は古川哲史が担当した⁴⁶。講師は吉満義彦（西洋現代倫理学）だった。美学・美術史学第一講座（美学）は大西克礼が担当した。これが終戦前後の状況であった。

6. まとめ

以上のように、主に講義題目をもとに戦前の東大哲学科を概観すると、次の4点が浮かび上がってくる。

(1) 大正期以降の四本柱とその系譜関係

大正期以降、哲学科の授業構成は、(a) 古代・中世哲学、(b) 近代ドイツ哲学、(c) 現代ドイツ哲学、(d) 英米哲学の四本柱になっていく。(a) 古代・中世哲学では、ケーベルが始めた古代・中世哲学史が、波多野精一、石原謙、出隆に引き継がれるとともに、出隆が助教授になると、哲学演習でもギリシア語の原典講読が例年行われるようになる。(b) 近代ドイツ哲学もまた、ケーベルによるカント、ヘーゲル、ショーペンハウアーの紹介に端を発するが、桑木巖翼が教授に着任すると、主にヴィンデルバントやリッケルトら西南学派によるカント解釈を導入しつつ、カントからヘーゲル、それ以後の19世紀ドイツ哲学を講じるようになる。また、哲学演習では毎年カントかヘーゲルの原典講読が行われるようになり、桑木退任後は伊藤吉之助、池上鎌三がそれを引き継いでいる。(c) 現代ドイツ哲学は、長年講師を務めた得能文の講義に始まり、ハイデガー本人に学んだ伊藤、そしてフッサール『イデーンI』の訳者でもある池上が講義に加えて演習も行うようになる。(d) 英米哲学は、主に大島正徳が長年講師として、イギリス経験論やプラグマティズム等の講義と演習を担当した。

(2) 欧米の思潮に即した授業内容の変化

東大草創期は、フェノロサが1860-70年代に英米圏で流行した進化論哲学を講義し、外山正一がベンサムやミルらイギリス功利主義、スペンサーやバインの心理学、社会学を導入し

⁴⁵ 今道友信『断章 空気への手紙』、85頁。および『中世の哲学』岩波書店、2010年、565-566頁。なお、この年度は伊藤の演習の受講者は今道一人だった。

⁴⁶ ただし、『東京大学百年史 資料三』によれば、古川が助教授になるのは1949（昭和24）年5月であるため、制度上は第一講座が和辻、第二講座が金子のままであった可能性が高い。

た。1890年代になると、井上哲次郎やケーベルが西洋哲学史を講じる中で、ショーペンハウアーやエドゥアルト・フォン・ハルトマンのペシミズムを紹介するようになる。また、同時期には中島力造がイギリス理想主義と19世紀後半の英米圏におけるカント・ヘーゲル解釈を講じ、元良勇次郎がフェヒナーの精神物理学からヴィルヘルム・ヴントの実験心理学を導入している。大正期に桑木巖翼が着任すると、新カント派、とりわけヴィンデルバントやリッケルトら西南学派の受容が始まる。また、ほぼ同じ頃から得能文が現代哲学を広く紹介し、特にボルツァーノからフッサール現象学までを導入し、大島正徳がプラグマティズムをはじめとする現代アメリカ哲学を紹介している。その後、第一次世界大戦後にドイツ留学をした世代の伊藤吉之助が着任すると、ハイデガーやヤスパーズの実存思想を導入した。こうした授業内容の変化は、当時のイギリス、ドイツ、アメリカの思潮に即したものであった。

(3) 東洋哲学史の消滅

1923（大正12）年3月の井上哲次郎の退官とともに、東大哲学科からは東洋哲学史をはじめ東洋哲学に関する一切の講義が消えている。これは当時もう一人の哲学科教授だった桑木巖翼の方針によるものである。他方、倫理学科では、最初の16年間は中島力造が一人で西洋倫理学を担当していたが、1908（明治41）年度から深作安文が講師として水戸学の道徳思想や国体論を講義し始め、1912（明治45）年の助教授就任に伴い、日本倫理学概説を新設して担当するようになる。深作はこの概説を退官時まで続け、後任の和辻哲郎は日本倫理思想史概説としてこれを受け継ぐ。その後、古川哲史がこの概説を担当する。現在の哲学専修課程が事実上「西洋哲学専修課程」であるのに対して、倫理学専修課程が西洋倫理想と日本倫理想の二本立てになっているのは、こうした事情によるものである。

(4) 現在の授業構成の起源

現在の哲学専修課程の授業構成は、哲学概論、西洋哲学史概説第一部・第二部、哲学特殊講義、哲学演習である。こうした授業構成は、ケーベルの授業に由来している。哲学概論は、ケーベルが初年次向けに開講した *Introduction to Philosophy* に相当する。この授業で、ケーベルは哲学の定義や分類、方法など、まさに西洋哲学の初学者向けの講義をしている⁴⁷。ところが、井上哲次郎はこれとは別の発想を抱いており、ケーベル退任後は哲学概論で東西比較論を扱うようになる⁴⁸。その後、井上が退官すると、桑木は新カント派の潮流を踏まえたドイツ哲学中心の哲学概論に切り替える⁴⁹。これが現在の哲学概論の原型に当たる。西洋哲学

⁴⁷ ケーベルの *Introduction to Philosophy* の講義録は下田次郎が翻訳し、『哲学要領』（南江堂、1897年）として出版している。

⁴⁸ 正確には、ケーベル在任中から、ケーベルが哲学概論を担当しない年度は、井上が哲学概論を講じていた。講義題目が判明している1895（明治28）年度以降では、少なくとも1908（明治41）年度、1910（明治43）年度、1912（大正元）年度の3年は、井上が哲学概論を担当している。

⁴⁹ 1927（昭和2）年度の哲学概論の講義録によれば、桑木は哲学の定義や分類、方法から始め、

史概説で古代から近代までを扱う伝統もケーベルの西洋哲学史に由来する。ケーベル退任後は桑木が引き継いだ。出隆が助教授になると、概説を二つに分割して、古代・中世哲学史に当たる第一部を出に任せ、近代哲学史に当たる第二部を自らが担当するようになる。こうして現在の形が定まった。哲学特殊講義と哲学演習は、ケーベルの2年次・3年次向けの授業に由来するが、これを現在の形に確立したのも桑木であった。つまり、現在の哲学専修課程の授業構成は、概してケーベルに由来しつつも、桑木が確立したものといえる。

第2章 戦前の『哲学雑誌』の成立と変遷

本章では、東大哲学科の学生が中心となって組織した学会「哲学会」とその機関誌『哲学雑誌』の成立事情と理念を確認した上で、同誌の戦前のバックナンバーについて、大まかな傾向分析を行う。

1. 哲学会と『哲学雑誌』の成立

1884（明治17）年1月26日、東京大学文学部の学士たちによる学会として「哲学会」が結成された。当時の報告によれば、井上円了が中心となって、井上哲次郎、有賀長雄、三宅雄二郎（三宅雪嶺）ら若手の有志数十名が学習院に集まり、加藤弘之、西周、中村正直、西村茂樹、外山正一、原坦山、島地黙雷らの協力を得て、計29名の学会として出発した。彼らのうち、井上哲次郎ら若い世代は、東京大学文学部を卒業したばかりの学士たちで、いずれもフェノロサの教え子である。他方、加藤弘之らは、東大草創期の教育を担った世代に属し⁵⁰、かつて『明六雑誌』を刊行していた面々でもある。同じ学会の中に、二つの世代が同居していたことは注目すべきである。

発足まもない哲学会の主な活動は、月例会を開くことであった⁵¹。哲学会の結成が決議された第1回月例会の翌2月、さっそく第2回が開かれ、島地黙雷と井上哲次郎が講演をしている。島地の講演は「法の説」、井上の講演は「支那哲学概論」という題だった。月例会は3年間にわたり計26回開催されたが、この時期は特に仏教関係の講演が多かった。その後、1887（明治20）年2月になると、月刊の『哲学雑誌』が創刊された⁵²。

主に知識哲学の問題を講じている。この講義録は、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧できる。

⁵⁰ 加藤弘之は東京大学法文理工学部総理であり、同文学部で外山正一は心理学・英語・社会学、中村正直は漢文学、原坦山は仏教を講じていた。

⁵¹ 哲学会の会則によれば、月例会は毎月20日午後3時から開くものとされていた。ただし、同日が土日や祝祭日の場合はその翌日とし、7月、8月、12月は月例会はなかった。なお、月例会を無断で6回欠席すると除名処分とされた。

⁵² 『哲学雑誌』創刊は1886（明治19）年12月18日に開かれた臨時会で決議された。1887（明

▼ 第2回～第26回月例会の講演題目

| | 発表者 | 題目 | 備考 |
|------|--------|-----------------------|--------------|
| 第2回 | 島地黙雷 | 法の説 | |
| | 井上哲次郎 | 支那哲学概論 | |
| 第3回 | 外山正一 | 斯賓撒氏不可知的 | 斯賓撒 = スペンサー |
| | 原坦山 | 印度哲学と諸学の径庭ある説 | |
| 第4回 | 神原精二 | 依正二報 | |
| 第5回 | 嘉納治五郎 | 意を論ず | |
| | 長瀬時衡 | 身体の強弱人寿の長短を論ず | |
| 第6回 | 三宅雄二郎 | 耶穌を論ず | 耶穌 = キリスト |
| | 吉谷覚寿 | 諸法の原理 | |
| 第7回 | 寺田福寿 | 仏教と理学との関係 | |
| 第8回 | 加藤弘之 | 男の女を壓するの要 | |
| | 小崎弘道 | 基督教を信ずるの理由 | |
| | 佐々木東洋 | 仏教に信を起せし所以 | |
| 第9回 | 小崎弘道 | 基督教を信ずるの理由 (前回の続き) | |
| | 佐々木東洋 | 仏教に信を起せし所以 (前回の続き) | |
| 第10回 | 原坦山 | 仏教の実帰 | |
| 第11回 | 中村正直 | 我は造物主あることを信ず | 造物主 = 創造主 |
| 第12回 | 南條文雄 | 印度哲学中数論の綱領 | 数論 = サーンキヤ学派 |
| 第13回 | 棚橋一郎 | 信と理との弁 | |
| | 高橋吾郎 | 仏教哲学一斑 | 「班」は「斑」の誤植 |
| 第14回 | 井上円了 | 偶然論 | |
| 第15回 | 吉谷覚寿 | 仏教についての疑問に答ふ | |
| 第16回 | 井上円了 | 偶然論 (第14回の続き) | |
| | 原坦山 | 学教の異同及び仏教諸教の異同 | |
| 第17回 | 島田重礼 | 東洋哲学の概略 | |
| | 有賀長雄 | 孔門哲学或考 | |
| 第18回 | 寺田福寿 | 真宗大意 | |
| 第19回 | 有賀長雄 | 孔門哲学或考 (第17回の続き) | |
| 第20回 | 原坦山 | 仏教に就ての疑問に答ふ | |
| | 外山正一 | 読心術 | |
| 第21回 | 小崎弘道 | 「スピリチュアリズム」并に「メスメリズム」 | |
| 第22回 | 加藤弘之 | 社会の外に道德なし | |
| | 清野勉 | 心理学上の一説 | |
| 第23回 | 島地黙雷 | 因縁の種類 | |
| 第24回 | 西村茂樹 | 洛日克と因明との異同 | |
| 第25回 | 高島嘉右衛門 | 神人感通の理由 | |
| 第26回 | 嘉納治五郎 | 功利教 | 功利教 = 功利主義 |

治20)年1月22日付の『官報』によれば、同年1月18日に内務省から定時刊行物の許可を得ている。

『哲学会雑誌』は論説と雑報から構成されているが、論説には会員による論文（哲学会などでの講演原稿を含む）、雑報には当時の学界状況の報告や海外雑誌の記事の紹介が載っている。また、同誌の巻末には、哲学会の月例会の報告も記されている⁵³。創刊当時は1号8銭だったが⁵⁴、予想以上に購読されたようで、当時の東京日日新聞の広告から、第1号は少なくとも2回重版されたことが分かっている。

『哲学会雑誌』は第63号まで刊行されるが、1892（明治25）年に第64号をもって『哲学雑誌』に改題され、従来の論説や雑報のほか、書評や新刊紹介、古典の解題、思想家の略伝が付け加わった。同誌は1943（昭和18）年まで月刊を保ったが、戦中期から戦後にかけて刊行スピードが落ち、1962（昭和37）年以降は年刊に定着し、現在に至っている。現時点の最新号は2018年発行の第805号である。

2. 『哲学会雑誌』創刊時の理念

『哲学会雑誌』はいかなる性格の雑誌として出発したのだろうか。まず、『哲学会雑誌』創刊時の理念を確認することから始めたい。

『哲学会雑誌』毎号の表紙裏には、同誌の趣旨説明が漢文で示されている。その末尾で同誌が扱う11の学が挙げられている。

哲学諸科別標如左。

| | | | |
|-------|------|------|------|
| 純正哲学 | 心理哲学 | 論理哲学 | 倫理哲学 |
| 審美哲学 | 政法哲学 | 社会哲学 | 宗教哲学 |
| 付 教育学 | 史学 | 文学 | |

「純正哲学」という表現は、現在ではほとんど見かけないが、明治期にはよく用いられていた。井上哲次郎ら若い世代が使い始めたばかりの言葉で、しばしば「形而上学」とも言い換えられた。当時のいくつかの記述を見るかぎり、「純正哲学」という語は、哲学の中でもその大本にある原理や原則を論究する学として、共通に理解されていたようである⁵⁵。他方、

⁵³ 『哲学会雑誌』創刊前の月例会の報告は、次の記事にまとめられている。井上円了「哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ（前号の続）」（『哲学会雑誌』第1冊第2号、41-44頁）。

⁵⁴ 当時の他の学術雑誌と同程度の値段であったようである。明治20年代は日刊の新聞（4頁）が1部1銭、東京大学の学費が月額2円50銭であったから、現代の感覚でいえば、1号当たり1000円前後か。なお、入会者には毎号配布されたが、会費は月額10銭、入会金は1円であった。会費は毎月の哲学会例会で支払った。初期の発行部数に関しては、『哲学会雑誌』第3冊第27号所収の雑録「日本哲学の現況」161頁に、「我哲学会雑誌（毎回発売高凡そ千数百部）」という報告が見られる。

⁵⁵ 「純正哲学」の定義は、井上円了による次の記述が簡潔に示している。「又哲学中にも其原理の原理其原則の原則を論究する一学科あり、之を純正哲学と称す」（『哲学の必要を論じて本会の沿革に及ぶ』『哲学会雑誌』第1冊第1号、6頁）。また、三宅雄二郎は、哲学の本来的な意味を純

「心理哲学」「論理哲学」以下については、当時においても珍しい表現である。東大が創設された頃から既に「心理学」「論理学」等の訳語が定着していたにもかかわらず、ここではあえて「哲学」という語が強調されている。「人文諸科学を包摂する学としての哲学」という理念が自覚された結果であろう。

『哲学会雑誌』の特徴の一つは、純正哲学への注目にあるが、それはフェノロサが導入した進化論哲学に満足できなかったことの現れでもあったようである。井上哲次郎の回想がこのことをよく表している。

然しながら同時に吾々学生はシュエグレル氏の哲学史だの、ユーベルウェッヒ氏の哲学史だのを読んで、独逸の哲学思想に接近して居ったのみならず、又同時に原坦山氏の『大乘起信論』の講義を聴いて居った。『起信論』の講義によつて真如実相のことが出来るのみならず、これと似通つた思想が独逸の哲学にもあることを考へ、ダーキン主義の進化論だの、スペンサーの説き出した進化主義の哲学などによつて哲学的疑惑を解決することは出来なかつた。も一つそれより深い形而上学的の哲学を求むるの念が旺盛であつた。(井上哲次郎『懐旧録』、202頁)

フェノロサが力説する進化論哲学に飽き足らず、西洋哲学史を広く勉強し、かつ漢学や仏教も学びながら、それらを統一するいっそう深い次元の哲学を求めていたことが分かる。これが、『哲学会雑誌』で「純正哲学」を強調する傾向となって現れることになる。

さらに、上記の引用はもう一つ重要な点を示唆している。それは、当時の「純正哲学」が「東洋哲学」をも含むものとして理解されていることである。「東洋哲学」という語それ自体は、Oriental Philosophy または Eastern Philosophy の訳語であり、西洋に由来する概念ではあるが、井上哲次郎らは「東洋哲学」という概念の下で、仏教や儒教を新たに捉え直そうとしている。

これは『明六雑誌』の世代とは大きく異なる点である。例えば、津田真道は『明六雑誌』の中で、伝統的な漢学を「虚学」と断じ、西洋的な諸学問を「実学」と捉えた上で、実学こそが普及されるべきであると述べていた。

いま人、口を開けばすなわち曰く、開化、開化。開化浅深の度は、なお黑夜より白昼に移るがごとく、漸をもって移る。その移るゆえんは職^{もと}として国内に流行する法教と学問とによる。けだし学問を大別するに二種あり。それ高遠の空理を論ずる虚無寂滅、もし

正哲学に求めている。「今日にては哲学の尚ほ純正哲学より頗る広濶^{こうかつ}の旨意を含むも、概して定義を付すれば、原理を考究する学となすを最も当れりとす」(「哲学の範囲を弁す」『哲学会雑誌』第1冊第1号、13-14頁)。他方、井上哲次郎は、東大哲学科教授就任後の「純正哲学」の講義を序論、意識論、思惟論、認識論、現象即實在論という構成で組み立てている。また、純正哲学に次いで、理論的哲学、実践的哲学が続く体系を考えていたようである。

くは五行性理、あるいは良知良能の説のごときは虚学なり。これを実物に徴し、実象に質して、もっぱら确实の理を説く、近今西洋の天文、格物、化学、医学、経済、希哲学のごときは実学なり。この実学、国内一般に流行して各人道理に明達するを、真の文明界と称すべし。（津田真道「開化を^{すすむ}進める方法を論ず」⁵⁶）

それに対して、自身も『明六雑誌』の世代に属していた加藤弘之は、『哲学会雑誌』の中で次のように述べている。

然れども又西洋諸派の哲学を修むる人々の如きも強ち釈迦孔孟の主義を以て陳腐の空論となさず、其中猶真理の存するものあらば、好て之を採択するの念慮なかるべからざるは勿論なり、然らざれば是亦西洋主義を以て本尊となすものなればなり、是れ皆真理を探究するの道に反し哲学の本意に^{もど}戻るものと云ふべきなり。（加藤弘之「本会雑誌の発刊を祝し併せて会員諸君に質す」⁵⁷）

ここでは、漢学は「陳腐の空論」として捨て去られるべきものではなく、そこに真理が存するのであれば、西洋の諸学問と同等に探究されるべきものであるとされている。これは、明らかに『明六雑誌』の頃の風潮とは異なっている。井上哲次郎ら若い世代は、こうした潮流の中で、仏教や儒教にも目を向けていくことになる。

3. 戦前刊行分の傾向分析（タイトルの分析）

純正哲学と東洋哲学を重視する雰囲気の中で生まれた『哲学会雑誌』（のちに『哲学雑誌』）は、その後どのように内容を変化させていくのだろうか。以降は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている書誌情報などから作成した全記事データベース⁵⁸をもとに、同誌の戦前のバックナンバーについて、大まかな傾向分析を行うことにする。

まずは、時期ごとの雰囲気をつかむため、1890年度、1900年度、1910年度、1920年度のそれぞれの全論説のタイトルを例にとって見てみよう。

⁵⁶ 『明六雑誌（上）』岩波文庫、1999年、117-118頁。

⁵⁷ 『哲学会雑誌』第1冊第1号、3頁。

⁵⁸ 全記事データベースの作成にあたっては、『哲学会雑誌』全号と『哲学雑誌』第64号～第753号については、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている目次データをもとにし、第754号以降は追加でデータを入力した上で、全体にわたって誤入力 of 修正を行い、刊行年・収録号数・記事の種類・著者名・記事タイトル別に検索できるようにデータを整理した。さらに、記事タイトルをもとに、全記事について仮のキーワードを入力した。例えば、「英訳カント断定力批評に就て」という記事は、「英訳、カント、『判断力批判』」を仮のキーワードとした。これにより、少なくとも記事タイトルにおける人名や書名の表記揺れに囚われずに検索できるようになった。今後は記事全文を分析しながら、随時キーワードを修正する予定である。

▼『哲学会雑誌』第4冊（1890年度）の論説

| | | | |
|-------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 元良勇次郎 | 精神物理学 | 有賀長雄 | 社会学史略 |
| ケーニヒ | 「マイン・ド・ピラン」は仏蘭西の「カント」なり | 中島力造 | 利己主義と利他主義 |
| | | 島田重礼 | 墨子兼愛説を論ず |
| 三好文太 | 権輿の批評倫理家ソクラテス | 大西祝 | 倫理学は哲学か將た科学か元良勇次郎氏の論を評す |
| 井上円了 | 重量感覚論 | | |
| 南條文雄 | 博言語上梵語の功用 | 岡本監輔 | 亜細亜諸国太古之関係 |
| 大西祝 | 道德主義に就いて加藤博士に問ふ | 元良勇次郎 | 大西君に答ふ |
| 清野勉 | 進化主義の一大問題 | 南條文雄 | 宗教の定限 |
| 吉谷覚寿 | 妄想分別の始起如何 | 中島专精 | 仏教に就て倫理を組織す |
| 内田周平 | 宋儒所謂気 | 吉谷覚寿 | 心体の現象作用を論じて智徳双進の策に及ぶ |
| 雲英晃耀 | 読哲学会雑誌因明論 | | |
| 加藤弘之 | 最大数の最大幸福 | 大西祝 | 倫理攷究の方法並目的 |
| 中島力造 | 良心の説 | 井上哲次郎 | 性善悪論 |
| 大西祝 | 雲英晃耀氏の読哲学会雑誌因明論 | 谷本富 | 倫理学を如何せんや |
| 大内青巒 | 予の仏法 | 中島力造 | 「ヘーゲル」氏弁証法 |

▼『哲学雑誌』第15巻（1900年度）の論説

| | | | |
|-------|------------------------------|-------|------------------------------------|
| 加藤弘之 | 愛己愛他と Müssen 及び Sollen との関係 | 井上哲次郎 | 独立自主主義の道德を論ず |
| | | 清沢満之 | 宗教と文明 |
| 元良勇次郎 | 宗教觀念の研究 | 田中喜一 | 美意識の研究 |
| 波多野精一 | ヒュームがカントに及ぼせる影響 | 中島力造 | 加藤博士の新著「道德法律進化の理」を読む |
| 野田義夫 | 個性を論ず | | |
| 中島力造 | 心的科学の基礎学に就て | 桑木厳翼 | 経験と経験論に就きて |
| 姉崎正治 | 宗教なる概念の説明契機 | 熊谷五郎 | 教育の目的 |
| 久保得二 | 揚子雲の学を論ず | 加藤弘之 | 僕の新著「道德法律進化の理」に対する中島博士並に熊谷学士の批評を読む |
| 村上专精 | 未来二十世紀間に於ける宗教觀 | | |
| 高山林次郎 | 美学上の理想説に就て | | |
| 西晋一郎 | ロッチエの倫理説 | 大橋虎雄 | 朱熹の哲学 |
| 元良勇次郎 | 思想の発達と形式論理との関係 | 桑木厳翼 | 支那古代論理思想発達の概説 |
| 田中喜一 | 人間活動の統一的原理の一側面として宗教的意識の進化を論ず | 加藤弘之 | 拙著「道德法律進化の理」に対する中島徳蔵氏の批評を読む |
| 加藤玄智 | 仏耶両教は遂に一致調和すべからざる乎 | 速水滉 | 感情に関する研究 |
| | | 前田慧雲 | 伝教大師の天台宗に於ける系統 |
| 中島泰蔵 | 空間觀念の起源 | 熊谷五郎 | 前説の補充と加藤博士に対する答弁 |
| 中島徳蔵 | 理想的必然法 | 北沢定吉 | 因明学と形式論理学との比較 |
| 桑木厳翼 | 哲学難 | | |

▼『哲学雑誌』第25巻（1910年度）の論説

| | | | |
|--------|----------------------------|-------|-------------------------|
| 井上哲次郎 | 日本神話の新解釈 | 石井光躬 | 直接経験の意義 |
| 元良勇次郎 | 顕心儀に就て | 有賀長雄 | 神道国教論 |
| 姉崎正治 | 法身といふ語 | ロイド | 基督教及び仏教に及ぼせるアレキサンドリアの影響 |
| 加藤玄智 | 宗教学上より見たる仏陀の位置——問題の所在及其帰結 | | |
| 西田幾多郎 | 純粹経験相互の關係及連絡に就いて | 千葉胤成 | 統計的研究より観たる信仰の確度 |
| | | 井上哲次郎 | 哲学上より見たる進化論 |
| 藤井健治郎 | 懷疑と權威 | 田中喜一 | 文明史上に於けるロマンチズムの意義 |
| 石原謙 | 初代基督教に於ける Daemonen の信仰 | | |
| 鈴木宗奕 | 宗教哲学の意義(ドルネル氏「宗教の哲学綱要」を評す) | 井上哲次郎 | 唯物論と唯心論とに対する実在論の哲学的価値 |
| 服部宇之吉 | 儒教の天命説 | ダールマン | 大乘仏教の根源地 |
| 紀平正美 | 哲学批判の原理としての全体と部分 | 田辺元 | 措定判断に就て |
| | | 小柳司気太 | 讖緯学を論ず |
| 三沢糾 | 宗教の起源に関して一新仮定説を提供す | 藤原真亮 | 鳥類の本能に就て |
| | | 加藤弘之 | 進化学より見たる哲学 |
| 東海林辰三郎 | 孟子性善説の特質を論じて復性説に及ぶ | 中島力造 | 倫理学最近の傾向 |
| | | 吉田静致 | 人格的唯心論に就て |

▼『哲学雑誌』第35巻（1920年度）の論説

| | | | |
|-------|------------------------|-------|------------------|
| 井上哲次郎 | ヘツケルを追懐し人生の根本問題に及ぶ | 佐藤繁彦 | ハイムのルーテル論 |
| | | 深作安文 | 国家の心理 |
| 桑木巖翼 | モーゼス・メンデルスゾーン | 藤岡蔵六 | コーエンの思惟内容産出説と其批評 |
| 瀧精一 | 仏教の審美観と光明思想 | | |
| 紀平正美 | 主観化客観化の止揚せられたる契機としての個性 | 鹿子木員信 | プラトン主義に於ける哲学執権 |
| | | 望月信享 | 三たび起信論支那選述を論ず |
| 常盤大定 | 大乘起信論の真偽問題 | 城戸幡太郎 | 一般能力の仮定に就て |
| 吉田熊次 | ルソーの人性論の心理学的方面と哲学的方面 | 吉田熊次 | シカゴ派の教育学説 |
| | | 渡辺樸雄 | 経律二蔵の關係に就て |
| 大島正徳 | デュキーの実験主義に就て | 今福忍 | 否定の哲学的意義 |
| 土居光知 | 日本文学を通じて見たる文化の展開 | 紀平正美 | 論理主義と心理主義との別 |
| | | 常盤大定 | 三たび大乘起信論の印度選述を論ず |
| 桑田芳蔵 | 思考の実験的研究につきて | 野上俊夫 | 仏国現代の心理学 |
| 矢吹慶輝 | 哲学の社会化 | | |
| 村上専精 | 大乘起信論に対する史的研究 | 石原謙 | ヘレニスムス時代の宗教思想 |
| 吉田静致 | 価値と実在 | 入沢宗寿 | 教育の認識論的基礎 |
| 常盤大定 | 大乘起信論印度選述卑見 | 山岸光宣 | 独逸浪漫主義の哲学的基礎 |

論説のタイトルを見るだけでも、いくつか気付く点がある。第一に、明治中期は概論や概説が多く見られるのに対して、明治末から大正にかけては、より限定された対象を扱う論文へと移行していく。例えば、石原謙や吉田熊次、藤岡蔵六らの論説のタイトルは、それだけを見れば、現在の学術雑誌に載っていても違和感はない。第二に、明治から大正へと時代を経るにつれて、論者と研究対象が次第に固定化されていく。例えば、井上哲次郎や桑木巖翼が東西の思想を幅広く論じるのに対して、紀平正美はヘーゲル、藤岡蔵六はカントと新カント派、石原謙はキリスト教史、というように、専門の細分化が明確になる。第三に、論説そのもののあり方としても、明治中期には折衷主義的な東西比較論が見られたが、明治末以降は歴史研究に基づいた哲学論文が増えていく。専門が細分化されたことで、研究の精度そのものが向上した結果でもあるだろう。

さらに、別の観点からも分析をしてみたい。下の表は、雑報を含むすべての記事のタイトルをもとに作成したキーワードが各年代に何回現れるのかを数えたものである。西洋哲学のキーワードに限定したのではあるが、時代による傾向が見て取れる。

| | 1890年代 | 1900年代 | 1910年代 | 1920年代 | 1930年代 | 1940年代 |
|----------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| カント | 27 | 10 | 19 | 48 | 23 | 9 |
| ヘーゲル | 3 | 15 | 1 | 4 | 27 | 6 |
| スピノザ | 2 | 2 | 9 | 2 | 4 | 2 |
| ライプニッツ | 4 | 1 | 8 | 3 | 0 | 0 |
| デカルト | 1 | 0 | 0 | 0 | 10 | 7 |
| ニーチェ | 1 | 7 | 0 | 0 | 4 | 1 |
| スペンサー | 6 | 15 | 0 | 0 | 4 | 0 |
| ダーウィン | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 功利主義 | 2 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 進化論 | 7 | 3 | 6 | 0 | 0 | 0 |
| 厭世主義 | 3 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| ジェームズ | 3 | 5 | 9 | 0 | 0 | 0 |
| ヴィンデルバント | 0 | 0 | 10 | 4 | 0 | 0 |
| リッケルト | 0 | 0 | 10 | 4 | 5 | 0 |
| コーエン | 0 | 0 | 5 | 2 | 0 | 0 |
| オイケン | 0 | 0 | 3 | 3 | 0 | 0 |
| ベルクソン | 0 | 0 | 14 | 1 | 1 | 4 |
| ディルタイ | 0 | 0 | 2 | 2 | 8 | 1 |
| フッサール | 0 | 0 | 4 | 0 | 7 | 4 |
| ハイデガー | 0 | 0 | 0 | 1 | 7 | 3 |
| 現象学 | 0 | 0 | 0 | 12 | 22 | 16 |
| ヤスパース | 0 | 0 | 0 | 0 | 16 | 2 |

第一に、全年代を通して、カントの記事が最も多く、特に1910–1930年代に、カント研究が盛んになっている。第二に、功利主義や進化論は1890–1910年代、厭世主義(ペシミズム)は1890年代に流行するが、1910–1930年代には新カント派に関する研究が隆盛を迎え、やや遅れて1920年代から現象学が頻繁に主題になる。第三に、ヘーゲル、スピノザ、ライプニッツの研究は明治中期から一貫して見られるが、1920–1940年代にヘーゲル研究が加速する。また、デカルト研究はスピノザ研究やライプニッツ研究よりも遅れて始まっている。

4. 戦前刊行分の傾向分析(著者・記事内容の分析)

次に、著者と記事内容の分析を通して、より詳細に10年ごとの特徴を見ていきたい。ただし、これも分析対象は西洋哲学関連の記事に限定する。

(1) 1900年以前

この時期の代表的な著者としては、加藤弘之、井上円了、井上哲次郎、中島力造、元良勇次郎が挙げられる。加藤弘之は「強者の権利と道德法律の関係」(全4回)や「自然と開化との別」で、スペンサーとダーウィン主義をもとにした社会進化論を説く一方で、「最大数の最大幸福」でベンサム功利主義を紹介している。また、論争好きな性格から、著書『強者の権利の競争』(哲学書院、1893年)や『道德法律之進歩』(敬業社、1894年)をめぐる論争のほか、「仏教に所謂善悪の因果応報は真理にあらず」という挑戦的な論文を書き、因果応報に関する論争を引き起こしている。こうした論争には、大西祝、中島力造、元良勇次郎ら若い世代や仏教関係者が加わっている。

哲学会創設の提案者であった井上円了は、「不思議庵主人」の筆名で、コックリさんの起源がアメリカ人の伝えたテーブル・ターニングであることを解明した「こっくり様の話」(全3回)のほか、西洋のメスメリズムの影響を受けて書かれた「催眠術治療法」(全3回)、自身が熱海療養中に見た夢を分析した「熱海百夢」、のちの妖怪学につながる「妖怪学と心理学との関係」を発表している。

留学中であった井上哲次郎は、「万国東洋学会景況」「仏国哲学の概況」(全3回)で海外の最新状況を伝えた一方で、帰国後は「性善悪論」「我世界観の一塵」「現象即实在論の要領」を執筆し、自身の哲学体系を作り始めている。

帝国大学で倫理学の教授となった中島力造は、「「ヘーゲル」氏弁証法」「「カント」氏批評哲学」(全4回)で、主に英訳に依りつつ、カントとヘーゲルの概説をするとともに、「英国新「カント」学派について」(全4回)でイギリス理想主義(British Idealism)⁵⁹、とりわけトマス・ヒル・グリーン思想を紹介している。そのほか、ジョン・バーナードによるカント『判断力批判』英訳、ミュアヘッドをはじめとする英米圏の倫理学、アリストテレスの倫理

⁵⁹ 同論説では、グリーンのほかスターリング、ハリス、ケアード、ブラッドリー、ウォーレス、リチャードソンへの言及が見られる。なお、「英国新カント学派」という名称については、中島自身が的確ではないことを前置きした上で、仮設的に用いている。

学的諸著作や『デ・アニマ』の紹介等も書いている。

他方、同じく帝国大学で心理学を講じ始めた元良勇次郎は、「精神物理学」(全12回)「物理界と人事界との比論」(全4回)「ラッド」氏の知覚論を評す」「ヴント氏「心理学綱要」の緒論」(全2回)等を通して、ヘルムホルツの生理学、フェヒナーの精神物理学、ヴィルヘルム・ヴントの実験心理学、ジョージ・トランブル・ラッドの心理学を紹介している。

それ以外にも、有賀長雄がスペンサーやコントの社会学を踏まえて、日本初の社会学史として「社会学史略」(全5回)を書いているほか、大西祝が学位論文「良心起原論」の一部となる「良心とは何ぞや」に加えて、「倫理攷究ノ方法并目的」を發表している。さらに、まだ大学生であった波多野精一が「アナキシマンデルの「コスモス」」「カントの三段論法に就て」「カント倫理学説の大要」(全4回)を載せている。

当時の記事の傾向としては、ショーペンハウアーとエドゥアルト・フォン・ハルトマンを取り上げたものが多かった。列挙してみれば、姉崎正治「シヨペンハウエルの性行」(全2回)「非理性主義の觀念論、吠檀多 [=ヴェーダーンタ] とシヨペンハウエル」「ハルトマン宗教哲学」(全11回)、桑木巖翼「ハルトマン氏の宗教哲学論」(全5回)「ハルトマンの哲学史上の位置」(全2回)、松本文三郎「シオッペンハワー氏国家哲学」(全5回)、米山保三郎「シオペンハワー氏充足主義の四根 [=『充足理由律の四つの根拠について』] を論ず」(全2回)、岡野義三郎「形而上学的根本主義としてシヨペンハウエルの『意志』を論ず」(全3回)があった。この時期は、ドイツと同様に、日本でもショーペンハウアーやハルトマンを通じて厭世主義(ペシミズム)が流行していたため、それを踏まえた雑報・雑録記事として「厭世教の影響」「ハルトマン」氏の厭世主義」「厭世教」が見られる。また、それが仏教に飛び火したため、吉谷覚寿「仏教は厭世主義にあらざるか」のような論説も出ている。

また、西洋の形式論理学と古代インドの因明との比較も話題となったようで、村上专精「因明とロジックの対照」「因明学の起源」のほか、大西祝による雑報「因明に就いて」とそれに対する雲英晃耀の反論「読哲学会雑誌因明論」、さらに大西の再反論「雲英晃耀氏の読哲学会雑誌因明論」が見られる。雲英晃耀は真宗大谷派の僧で、当時は因明研究の第一人者であり、『東洋新々因明發揮』(1889年)の著者として知られていた。その後、大西は再びこの課題に取り組み、「形式的論理学の三段論法因明の三支作法并に弥児の帰納則を論ず」(全6回)を書いている。

これに加えて、西洋哲学史の連載の試みが見られるのも、この時期の特徴である。筆者不明の雑録「西洋哲学小史」(全17回)では、英語や英訳の哲学史の教科書を参考にして、タレスからヘレニズム期の懐疑主義までをまとめている。また、これを踏まえて、大西祝がより精密に哲学史を描き直す試みとして、「ソクラテス前の希臘哲学」(全18回)で初期ギリシア哲学史を整理している。ただし、これも大西自身が断っているとおり、原典に当たることなく、いくつかの哲学史の教科書を比較検討してまとめたものである⁶⁰。

⁶⁰ 1900年には波多野精一「哲学史漫録」(全4回)という記事があるが、これは哲学史を描く試みというよりも、哲学史を題材にとった連作の雑文である。波多野は同記事で、カントの血縁上の

そのほか、『哲学字彙』（1881年刊行、1884年増補）の改訂に関わる記事も見られる。清野勉が「哲学字彙編纂のことを論じ併て世の言語改良家に告ぐ」（全4回）で、改訂への意見を述べているのに加えて、『哲学雑誌』の付録として改訂版の草稿を18回にわたり連載しているが、この連載は途中で終わってしまっている⁶¹。

(2) 1900年代

1900年以前から引き続き、井上哲次郎、中島力造、元良勇次郎が精力的に執筆している。井上が「倫理と宗教との異同いかん」「戦後に於ける我邦の宗教如何」（全2回）で、倫理と宗教の問題に取り組む一方、中島は「ブラッドレー氏の絶対新論を評す」で、イギリス理想主義を代表する哲学者であるブラッドレーの思想を紹介するとともに、スペンサーの紹介論文として「スペンサーの倫理学上の貢献」「スペンサーの自叙伝を読み所感を述ぶ」（全2回）を書いている。

また、元良勇次郎は「快樂は倫理の標準となり得べきや」「自然力と意志作用との関係」「精神作用中の統一作用に就きて」（全2回）、「心とは何ぞや」（全3回）等の論説のほか、『哲学雑誌』付録として「東洋哲学に於ける自我の観念」（全3回）や「心理学」（全38回）を書いている。このうち、「心理学」の連載は、心理学を体系的に記述しようとした試みである⁶²。さらに、意外なことに、「ヘーゲルの存在論に就て」という論文⁶³も載せている。これは哲学会での講演原稿で、ヘーゲル『小論理学』のうちの存在論の箇所の読解を試みたものである。

これに対して、若い世代としては、波多野精一、桑木巖翼、紀平正美、大島正徳、得能文、姉崎正治らがそれぞれ論文を書いている。波多野「ヒュームがカントに及ぼせる影響」は、もとはケーベルに提出した卒業論文であるが、この論文で波多野は前批判期のカントの論文を読み込み、ヒュームがいかなる意味でカントの「独断のまどろみ」を破ったのかを論じている。他には「時計の比喩に関してゲョーリンクス [=フーリンクス Geulincx] とライプニッツとの差異」「十八世紀の仏国に於ける感覚論と唯物論」（全2回）「十九世紀の独逸哲学大家」（全3回）がある。

桑木は「経験と経験論とに就きて」「ニーチェとドイッセン」「プラグマティズム」に就

祖先の話から説き起こし、スピノザとベーコン、ライプニッツにおける表象の問題、18世紀ドイツにおけるスピノザ主義、カントの存在論的論証という順で、あまり論脈を気にせず、エピソードを書き連ねるという仕方で記述している。

⁶¹ 『哲学字彙』の改訂版として、井上哲次郎・元良勇次郎・中島力造共著『英独仏和 哲学字彙』が刊行されるのは1912年である。

⁶² 元良はこれ以前に『心理学』（金港堂、1890年）や『心理学』（敬業社、1897年）で体系的な記述を試みている。また、中島泰蔵とともにヴィルヘルム・ヴント『心理学原論（Grundriss der Psychologie）』（1896年）を翻訳し、『ヴント氏心理学概論』（全3巻、富山房、1899年）として刊行している。

⁶³ この論文では、ヘーゲル『小論理学』英訳を参考にしつつも、いちおうドイツ語の原文を確認し、原語を挙げながら論述している。

て」(全2回)といった西洋近代哲学の論文のほか、19世紀ヨーロッパ思想史の本⁶⁴からの抜粋を訳して、「十九世紀科学精神の発達」(全3回)として載せている。また、その一方で「支那古代論理思想発達の概説」(全2回)等、西洋哲学以外の論文も書いている。

ヘーゲル論理学の研究から出発した紀平は、「自我に就て」「ヘーゲル哲学と其の翻訳とに就て」「意識的事実としての推理作用、学問研究の方法に就て」「矛盾に対する三様の態度及び相互の關係」を發表する一方で、ヘーゲル『小論理学』をドイツ原文から小田切良太郎と共訳し、「ヘーゲル氏哲学体系」(全13回)として載せている。この翻訳は未完で、『小論理学』第126節の途中までで終わっている。

それ以外には、大島が19世紀イギリスの議論を手がかりに人格概念の研究をまとめた「人格の根本的研究」(全6回)のほか、得能文「プラグマティストの純粹経験説に就て」や姉崎正治「ジエームス氏の宗教的経験に就きて」(全2回)が見られる。

この時期の特徴としては、まずエドゥアルト・フォン・ハルトマン受容の深化が認められる。雑録で深田康算がハルトマン『無意識の哲学』第11版の紹介を書いているほか、藤井健治郎が「ハルトマン氏の自律及び他律論」(全2回)を載せている。また、1899年秋に来日したジョージ・トランブル・ラッドの影響も見られる。ラッドは同年9月25日から10月6日にかけて帝国大学で講演をしているが、その筆記録を塚原政次が抄訳したものが「心理学講演」(全10回)として載っている。これは増補訂正された上で、塚原政次抄訳『ラッド氏心理学講演』(富山房、1901年)として出版されている。

そのほか、西田幾多郎の初期論文「實在に就て」と「純粹経験と思惟、意志、及知的直観」が載っていることも特筆に値する。これらは、のちに『善の研究』(1911年)に結実する論文である。

(3) 1910年代

この時期に最も多くの署名記事を書いたのは、東北帝国大学理科大学講師時代の田辺元である⁶⁵。田辺は「自然数論」(上・下)「連続、微分、無限」(全3回)「負数及び虚数」(全2回)「変数及び函数」(全2回)「幾何学の論理的基礎」(全3回)といった一連の数学論を發表している。これらは、『哲学研究』に發表した他の諸論文とともに、博士論文「数理哲学研究」の一部となり、のちに改稿されて『数理哲学研究』(岩波書店、1925年)として出版されることになる。それ以外にも、「措定判断に就て」「認識論に於ける論理主義の限界」(上・下)「数学的对象の存在に就いて」「意識一般」に就て」といった論文に加えて、「相対性の問題」「カントと自然科学」「ブートルー氏「自然法の觀念」」(全3回)「ブランク氏『物理学的世界形象の統一』」(全3回)「相対性原理に対するナトルプ氏の批評」「ポアンカレ氏『空

⁶⁴ John Theodore Merz, *A History of European Thought in the Nineteenth Century*, vol. 1, Edinburgh & London: William Blackwood and Sons, 1896.

⁶⁵ 田辺元が京都帝国大学から博士号を取得したのが1918年、西田幾多郎に招かれて京都帝国大学文学部哲学科助教授になるのは1919年である。

間と時間』等の紹介記事を書いている。

井上哲次郎も多くの論文を発表しているが、いくつかの関心が並行していたようである。東洋哲学史については「日本神話の新解釈」(全2回)「道の観念に就て」(全2回)、進化論哲学については「哲学上より見たる進化論」「進化論と歐洲大戦」(全3回)、生命論については「死生の問題に就て」(全3回)「生命に伴ふ五種の特徴」「生理学者の生命論」、自らの哲学体系については「唯物論と唯心論とに対する実在論の哲学的価値」「意志活動と自我概念」(全2回)「余の見たる哲学と科学」を書いている。

他に精力的に執筆していた人物としては、小尾範治と紀平正美が挙げられる。小尾はのちに岩波文庫のスピノザ『エチカ』の翻訳者として知られるようになるが、この時期には「ブルノーの哲学的世界観」(全4回)、「スピノザ哲学に於ける統一の観念に就て」(全4回)、「カントに対して見たるプラトーの認識説」(全2回)のほか、最新のドイツ哲学・フランス哲学の紹介記事を書いている。紀平はヘーゲル論理学に関する一連の論文として、「否定の論理」「絶対的現実論」「意思の論理」「信仰の論理」「範疇に就て」「実現の論理」「論理主義」「純粹論理の世界」を発表している。

また、西田幾多郎関連では、「純粹経験相互の關係及連絡に就て」「法則」「自然科学と歴史学」「種々の世界」の4論文のほか、高橋里美が『善の研究』に対する書評として「意識現象の事実と其意味」(上・下)を発表し、西田がそれに対して「高橋(里)文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」で応答している。これらの論文のうち、「法則」「自然科学と歴史学」「高橋(里)文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」は『思索と体験』(千草館、1915年。のちに岩波書店、1919年)、「種々の世界」は『自覚に於ける直観と反省』(岩波書店、1917年)に収められることになる。

この時期の傾向としては、ドイツ語原典に即したカント研究、新カント派やベルクソン、フッサールの紹介、キリスト教哲学の研究が目立っている。まず、カント研究については、桑木巖翼「カントの歴史哲学に就て」「カントの観たる日本」「カントの範疇表の順序に就て」、紀平正美「カントの『構成的原理』と『統制的原理』」、波多野精一「カントの宗教哲学について」、鹿子木員信「カントの『永遠平和』を論ず」(全2回)、藤岡蔵六「カントの『純粹理性批判』に現れたる時間論」(全3回)の諸論文が見られる。このうち、桑木の3論文に関しては、のちに「カントの歴史哲学に就て」と「カントの観たる日本」は『カントと現代の哲学』(岩波書店、1917年)、「カントの範疇表の順序に就て」は『カント雑考』(岩波書店、1924年)にそれぞれ収められる。

新カント派の紹介については、宮本和吉「ヘーゲリアニズムの復興(ウィンデルバンド)」、大塚保治「リッケルトの歴史科学説の批評」、桑木巖翼「キルヘルム・キンデルバンド」、鈴木俊行「ヴィルヘルム・ヴィンデルトの地位及学説」の諸論文のほか、著作解題として高橋里美「リッケルト氏『価値の系統に就いて』」(上・下)、宮本和吉「リッケルトの『論理的妥当と倫理的妥当に就いて』」(上・下)、抄訳として宮本和吉「リッケルト『認識論の二つの道』」(全4回)、翻訳として伊藤吉之助「ナトルプ『カントとマールブルヒ派』」(全3回)、

近藤哲雄「ヴィンデルバント『論理学の原理』」(全3回)が載っている。この時期にヴィンデルバントやリッケルトら西南学派を中心に、新カント派の紹介が集中的に行われていることは特筆すべきである。これにより、東大哲学科の主流も、井上やケーベルがもたらしたショーペンハウアーからエドゥアルト・フォン・ハルトマンの系譜に代わって、新カント派が強調する認識論としての哲学になっていく⁶⁶。

フッサールの紹介としては、伊藤吉之助が『厳密な学としての哲学』の翻訳を「フッサール『学としての哲学』」(全4回)として連載している。この連載が載った1915年は、東大哲学科で現代哲学を講じた得能文が講師を始めた年でもある。西田幾多郎『思索と体験』におけるフッサールへの言及と同時期の紹介として注目に値する。

ベルクソンの紹介については、得能文「ベルクソン哲学の背景及び实际的傾向」、高橋穰「ベルクソンの物質と記憶」(上・下)、大島正徳「ベルクソン哲学の批評」等の論文のほか、小山鞆絵「ベルクソンの「時間と自由意志」」(全3回)の紹介記事が載っている。

キリスト教哲学の研究では、石原謙「初代基督教に於ける Daemonen の信仰」(全2回)「アレキサンドリアのクレメンスと希臘哲学」「ルータに於ける権威思想並びに自由の観念」「ルーターと神秘主義」、佐藤繁彦「ルーターの経験と神秘説」(全4回)「再び「ルーターの経験と神秘説」に就いて」(全2回)に加えて、石原と佐藤が誌面上で論争を交わしている。

これ以外に特筆すべき事柄としては、『哲学雑誌』300号記念とライブニッツ特集号(359号)が挙げられる。300号記念では、加藤弘之「余の科学及び哲学の定義」、井上円了「倫理の門内に向上の一路を開け」、元良勇次郎「意志と自然力」、桑木巖翼「一と多」、西田幾多郎「法則」、田中喜一「プラグマチズムの後」、紀平正美「絶対的現実論」、吉田静致「唯物論的進化論の畫竜を唯心論的に点晴せよ」、姉崎正治「世界と人格」、中島力造「現今の倫理学と意志の自由説」、井上哲次郎「生命に伴ふ五種の特徴」、藤井健治郎「価値」等、豪華な顔ぶれが執筆している。他方、ライブニッツ没後200周年を記念した特集号では、ライブニッツを主題とした論文として、井上哲次郎「ライブニッツ哲学所感」、中島力造「ライブニッツとクラークとの論争に就いて」、長岡半太郎「科学者としてのライブニッツ」、紀平正美「予定調和」の4本が載っている。

また、1910年代は元良勇次郎、加藤弘之、中島力造、井上円了が相次いで死去する時期でもある。それぞれについて追悼記事が書かれている。

(4) 1920年代

この時期は、教師の世代としては、井上哲次郎、桑木巖翼、紀平正美、大島正徳らが多くの記事を書いている。井上は1910年代と同様に、関心の幅が広がったようである。宗教論として「宗教の帰趣と道德の極致」(全2回)「宗教の本質に就て」、道に関する考察として「道

⁶⁶ こうした主流の変化は、同時代のドイツでも生じている。また、井上が留学した頃は、ハイデルベルク大学にクーノー・フィッシャーがいたが、桑木が留学した頃には、後任のヴィンデルバントが教授を務めていた。この事情も両者の世代差を生み出す要因になったと思われる。

と法とロゴスに就て」「道の真意義を論じ倫理の根本原理に及ぶ」(全2回)、現象即实在論に関して「現象と实在とに就いて」(全2回)、生命論に関して「自然と人間」「人生の目的に関する考察」を發表している。

他方、桑木は自身の文化主義の立場を述べた「文化哲学に就て」を載せている。これはのちに『文化と改造』(下出書店、1921年)に収められることになる。それ以外には、「モーゼス・メンデルスゾーン」「判断論と哲学」「アリストテレスの判断論」「カントの物自体論に就て」「哲学の危機」「Quäbicker-Sieburth」「クェービッカー考補遺」といった哲学史研究の論文を載せている。このうち、「モーゼス・メンデルスゾーン」は『哲学大系及其他』(新生堂、1924年)、その他の諸論文は『哲学及哲学史研究』(岩波書店、1936年)に収録される。また、桑木は1926年9月に米ハーバード大学で開催された第6回国際哲学大会で発表をしているが、その英文発表原稿を加藤将之が翻訳したものが「日本哲学界の傾向」として掲載されている⁶⁷。

紀平は、ヘーゲル『精神現象学』で言われるところの「現象学」の意義を論じた「現象学(Phänomenologie)に就て」⁶⁸のほか、ヘーゲル論理学を背景にした論文として、「主観化客観化の止揚せられたる契機としての個性」「論理主義と心理主義との別」「論理的過程と実生活過程」「個別的判断」「思惟の思惟」「中庸に就て」「理性の要求」「認識に関して」「媒介」「批判の原理」「素と機」「陽明学と弁証法」を書いているが、タイトルからも容易に推察できるように、この時期にはヘーゲル論理学と仏教・儒教との総合を構想している。

大島は「デュキーの実験主義に就て」(全2回)「バートランド、ラッセルの哲学に就て」(全2回)「英国学派の特質」「純粹経験に就いて」「直接与件の問題」「サンタヤナの哲学」を通して、現代英米圏の哲学を精力的に紹介している。

これに対して、若い世代の著者の主たる関心は、近現代ドイツ哲学に向かっていた。現代ドイツ哲学に関しては、三枝博音と佐竹哲雄が多くの論文を發表している。三枝は「「存在」の意味」(全3回)で、カント、フィヒテからコーエン、リッケルトに至るまでの「存在」の問題を取り上げた一方で、「「志向的体験」の概念に就て」(全2回)や「観念的連関と事象的連関」(全3回)では、フッサール『論理学研究』『イデーニ I』および遺稿『イデーニ II』を分析している。そのほか、「デイルタイに於ける認識論」「デイルタイに於ける学の概念」「ヘーゲル論理学に於ける反省規定に就て」(全3回)を書いている。また、佐竹は、主にヴィンデルバントとリッケルトに依った「文化価値の論理的構造」(全3回)や、コーエンを援用したカント論である「根本原理の意味とその任務」、フッサール論である「前現象学と現象学」(全2回)や「純粹体験に於ける自我」(全3回)を載せている。

近代ドイツ哲学に関しては、児玉達童、山口諭助、金子武蔵の論文が見られる。児玉はカ

⁶⁷ これはのちに桑木巖翼『西周の百一新論』(日本放送出版協会、1940年)に付録として収められる。

⁶⁸ 紀平はこの論文で、フッサールらの現象学の動向に言及しつつも、自らは読んでいないことを述べた上で、あくまでもヘーゲルの言う「現象学」の意義を明らかにする旨を明言している。

ントの数学論を分析した「先批判期のカントに於ける「数学と哲学」「批判期のカントに於ける数学論」(全6回)「非ユークリッド幾何学発見当時に於けるカントの数学論に関する論議」のほか、「カントの「神の存在の証明」について」「認識論の限界に就いて」(全2回)を發表している。これらはすべて『カントの数学論の範囲に於て 外五篇』(甲子社書房、1926年)に収められることになる。それ以外にも、「ハイデッガーに於ける二箇の「存在の問題」の関係に就いて」を書いている。また、山口は「認識論と超越的対象」(全5回)というカント論のほか、カントを起点にしてボルツァーノからフッサール、マイノング、そしてジェームズ、デューイの真理論を扱った「真理と其標識」(全4回)を發表している。これに加えて、金子武蔵の最初期の論文「ヘーゲルの弁証法に関する一考察」(全2回)が掲載されている。

この時期の重要な特徴としては、新カント派に関する研究とボルツァーノからフッサール現象学までの紹介が挙げられる。まず、新カント派に関する研究としては、四宮兼之がヴァインデルバントの最終年度の講義録を抄訳した「歴史哲学の課題に就て」(全2回)や、大室貞一郎がカール・ジョエル(Karl Joël)のリツケルト論を翻訳した「リツケルトの「哲学体系」」のほか、三並良「ウキルヘルム・ヴケンデルバント」、中島徳蔵「ヴァインデルバントの倫理説を評す」が載っている。また、藤岡蔵六はコーエン『純粹認識の論理学』(岩波書店、1921年)の翻訳を出版する前年に「コーエンの思惟内容産出説と其批評」(全2回)を書いている。

ボルツァーノからフッサール現象学までの紹介については、得能文「ボルツァーノの知識学に就て」、加藤将之「現象学の直証論」、宮本和吉「現象学について」のほか、高木貞二がアメリカの心理学者であるエドワード・ティッチェナー(Edward Titchener)の論文「ブレンターノとヴント——経験心理学と実験心理学」を訳している。また、加藤将之がドイツの哲学者であるヨハネス・フォルケルト(Johannes Volkelt)の著書『時間の現象学と形而上学』の第1部の紹介記事を書いている。

そのほか、『哲学雑誌』の重要な号としては、3号にわたるカント特集号(446-448号)と500号記念が挙げられる。カント特集号では、吉田熊次「カントの哲学とヘルバルトの教育学との関係」、紀平正美「カントの判断の分類表に就て」、島本愛之助「カントの「判断力批判」に於ける倫理的意義」(全2回)、佐竹哲雄「根本原理の意味とその任務」、伊藤吉之助「Kant an und für sichに就て」、北吟吉「先驗的論理学に於ける主観の意義」、児玉達童「カントの「神の存在の証明」について」、桑木巖翼「カントの物自体論に就て」、吉田静致「絶対的形式主義と経験の等級」、山岸光宣「カント哲学とシルレルの芸術」といった幅広い視点からの論文が掲載されている。

また、500号記念では、井上哲次郎、紀平正美、桑木巖翼らが書いているほか、京都帝国大学文学部教授の田辺元が「明証の所在」を寄せている。田辺は同論文で、デカルトのコギトにおける明証性から説き起こし、ブレンターノやフッサールの言う「明証」の内実を論じている。また、東北帝国大学法文学部教授の石原謙も、同僚の外国人教師ヘリゲルと始めていたエックハルト研究の一端として、「エックハルトの『弁明書』の新発見について」を載

せている。なお、この 500 号には付録として「哲学雑誌総目録」が付いている。

これに加えて、1920 年代はケーベル、ヴィルヘルム・ヴント、ブートルー、オイケンら、井上や桑木らにとってよく馴染みのあった人物たちが死去した時期であり、それぞれについて追悼文が載っている。

(5) 1930 年代

この時期は、教師の世代としては、井上哲次郎、桑木巖翼、大島正徳、池上鎌三が記事を書いている。井上は 1920 年代に引き続き、複数の関心から論文を発表しているが、この時期になると、時代感覚のずれが目立つようになってくる。「神ながらの道に就いて」では、神道の「惟神の道」を紹介し、「カントの無上命法に対する東洋思想」では、カントの定言命法と『論語』『中庸』、そして弘法大師の思想との大雑把な比較を論じているが、当時の神道や中国思想、日本思想の研究水準から言えば、あまりに粗雑である。また、唯物論哲学への関心の高まりを受けて、「唯物主義の長処短処」を書いているが、これも西洋哲学史における唯物主義の伝統を雑に紹介しているのみである。折しも、この論文が発表される 2 年前の 1932 年には唯物論研究会が結成され、機関誌『唯物論研究』の刊行が始まっている。井上が紹介する程度の知識は、誰もがもっていたはずである⁶⁹。そのほか、井上は人間の年齢と人生観について「人生の諸問題」(全 2 回)を書いている。

桑木は、カント以降の近現代哲学における哲学用語の成立の傾向を分析した「言語と哲学——現今の哲学々風に就て」をはじめとして、「ヘーゲルの背後に在るもの」「危機の哲学とスピノザ及びロック」「ランベルトとカント」「ラインホルトの現代的意義」といった哲学史に関する一連の論文を書いている。これらは、『哲学及哲学史研究』(岩波書店、1936 年)に収められることになる。また、「非理性的なるもの」では、当時流行していた非理性主義の傾向に対して、理性主義を吟味し直すことで応答を試みている。他には、1937 年にパリで行われた第 9 回国際哲学大会における桑木の発表の仏文原稿を鶴田真次郎が訳し、「日本に於けるデカルト研究の現状」として載せている⁷⁰。この原稿では、朝永三十郎『デカルト省察録』(大思想文庫、岩波書店、1936 年)等、六つの邦語文献を簡単に紹介しながら、明治期以降の日本におけるデカルト研究の概要を述べている。

大島は「存在と本質」「現時の実在論の論争点について」で、英米圏の現代哲学における実在論の問題を扱ったほか、「ロックの哲学」を書いている。また、池上が「基礎的存在学への途」「意味の位相」「哲学的思索の地盤」「知の構造」といった一連の論文を載せている。

⁶⁹ おそらく井上は明治中期に言われていた「唯物論」と、昭和前期に流行した「唯物論」を混同してしまっている。確かに、明治中期には、一般にスペンサーの進化論哲学も唯物論として理解されていた。実際、井上に言わせれば、社会進化論を唱える加藤弘之は極端な唯物論者に分類される(Cf. 井上哲次郎「明治哲学界の回顧」結論)。だが、こうした把握の仕方は、昭和前期における「唯物論」の発想とはかなり異なっている。

⁷⁰ これものに桑木巖翼『西周の百一新論』の付録として収められる。

この時期の若い世代の傾向としては、まず現象学と実存思想に関する論文が顕著に見られる。主な著者は若山超閑、小松撰郎、鬼頭英一、山崎正一、斎藤信治、鈴木三郎である。若山は「現象学の哲学的地位」(上・下)「「信」の現象——信、信頼、信念、信仰」(全2回)のほか、シュライエルマッハー、ディルタイ、フッサール、シェーラー、ニコライ・ハルトマン、ヤスパースの紹介記事を書いている。

小松は「解釈の理論」「「理性と実存」について」(全2回)「カール・ヤスパースの問題」「ハイデッガー雑考(一)」を発表した一方で、「弁証法論理の基礎」「カントの理念に就いて」「性格学序説」も載せている。

鬼頭はフッサール、ハイデガー、ディルタイを手がかりに、「意味の構造」「倫理的行為の現象学的一考察」(全2回)「現象学的観念論と還元的方法」(全2回)「矛盾の種類に就いて」「知識の人間学」「ディルタイと生全体の概念」「生存の本来性」「現実性の問題」「了解の対象」といった一連の論文を発表している。また、レーヴィットに依拠した「共同存在の問題」(全2回)も書いている。

山崎はハイデガーやヤスパースに関する論文として、「哲学批判の理念——ハイデッゲル哲学の批判」(全2回)「ハイデッゲル哲学の基礎」「覚存哲学——カルル・ヤスペルス」を執筆したほか、ドイツ観念論、とりわけフィヒテに関する論文である「独逸観念論哲学の本質並哲学の根本問題に就いて」(全3回)を載せている。

それ以外にも、斎藤信治「ハイデッガーとヤスパース」(全3回)、鈴木三郎「ヤスペルスの瞬視的暗号読解に於ける実存の運命意識に就て——特にキエルケゴオルに証拠して」(全3回)「永遠のカントとヤスペルス」(全2回)が見られる。

また、ドイツ観念論を中心とした研究では、山口論助と岩崎武雄が多く論文を書いている。山口はフィヒテやヘーゲルにおける無の問題から出発し、「無」(全2回)「フィヒテと無」(全4回)「難解と深遠——一つの批判題目として」「ヘーゲルと無」(全3回)「無の芸術」(全2回)「空と無」(全3回)を発表している。他方、岩崎は「ヘーゲルに於ける精神と時間」(全2回)「カント哲学の根本問題」(全2回)を載せた以外に、「時間性と実体性——ニコライ・ハルトマン」を書いている。

これに加えて、ドイツ哲学以外に関する若手の研究も盛んになっている。まず、フランスにおける研究を踏まえた著者として、今泉三良と桂寿一が挙げられる。今泉は「聖トーマス哲学研究」「トマス・アクィナスに於ける存在の問題」を発表した一方で、「ル・セヌヌ『義務論』に就いて」(全3回)「ルイ・ラゼルの「全体的現在」に就て」(全3回)「ブーグレ「一般的教養に関するフランス的なる理解」」を通して、同時代のフランスの思想を紹介している。また、中世哲学史家のエティエンヌ・ジルソンによる中世哲学研究やデカルト研究を紹介した記事も書いている。

桂は最初「意味的存在と真理問題」(全3回)で、ボルツァーノ、ブレンターノ、フッサール、マイノング、コーエン、リッケルト、ニコライ・ハルトマンらを援用しながら、意味と真理の問題を論じているが、その後「『コギト』の問題——デカルト哲学の一考察」「偶因

論の発展」 「Conatus の概念とスピノーザ哲学」 を載せている。これらは、それぞれのちのデカルト研究、デカルト主義研究、スピノーザ研究につながるものである。

また、本格的な古代哲学研究の論文も多く見られるようになる。戦後に東京大学教養学部教授となる川田熊太郎は、この時期に「推理の範型」「プラトンのアトモン・エイダス」(上・下)「プラトン哲学に於ける生成するものに就て」(上・下)「オーギュスト・ディエスのプラトン解釈」(全3回)「プラトンの原因論」(全2回)「プラトン哲学の諸問題」を発表したほか、ドイツのプラトン研究者ユリウス・シュテンツェルの紹介記事も書いている。

それに加えて、出隆も「希臘に於ける哲学と諸科学」「希臘人の靈魂——希臘哲学に於ける人間学建設の失敗」(上・下)「アリストテレスの存在学と神学——「形而上学」Λの巻の解説」「アリストテレスの非実践的性格」(全2回)「アリストテレスの靈魂説と「能動理性」」(全2回)「古代自然学の科学性(上)」といった一連の論文を載せている。

さらに、ヘーゲル研究から出発しつつも、出隆から古代哲学研究の手ほどきを受けていた金子武蔵は、「アリストテレスに於ける存在」(全2回)「Substanz から Subjekt へ」「存在論の問題」「プシシとノモス」(全2回)「デ・アニマとニコマコス倫理学との翻訳」を通して、プラトンやアリストテレスを扱っている。それ以外には、ディルタイを手がかりにした「生の範疇」がある。

以上挙げた傾向に加えて、この時期に日本主義と結びつく論文が掲載されていることも見落としてはならないだろう。著者は紀平正美と利根川東洋⁷¹である。ちょうど彼らが国民精神文化研究所の所員として活動していた時期と重なっている。紀平はヘーゲル論理学と日本精神の総合を試みる論文として「日本精神とヘーゲルの弁証法」「実体としての「和」」を載せている。また、利根川は自身の体系の基礎となる論文「成・創造・生産」(全2回)を書いている。この論文そのものからは日本主義は読み取りにくいだが、これは『生みの哲学——日本的世界観の論理』(理想社、1942年)に収録される論文で、ここで展開された成る・作る・生むの三つ組は、のちに成る神(原始仏教)・作る神(ユダヤ＝キリスト教)・生む神(『古事記』の神話)に対応づけられて、日本主義を称揚する論理となっていく⁷²。

⁷¹ 利根川東洋は、東北帝国大学哲学科で高橋里美に学んだ後、国民精神文化研究所の所員となり、紀平の影響を強く受け、若くして日本主義の哲学体系を作り上げた人物である。主著『生みの哲学——日本的世界観の論理』には、高橋里美が序を寄せている。利根川の経歴に関しては、戦中期の利根川の論文や国民精神文化研究所の資料等しか情報がなく、正確な生没年や戦後の活動に関してはよく分からない。

⁷² 高山岩男の哲学的人間学においても、ヘーゲル論理学に由来する〈生む・作る・成る〉の論理が用いられる。服部健二が指摘するように、高山が「生む」と「作る」の総合として「成る」を捉え、民族国家と神話の形而上学を打ち立てたのに対して、利根川は「作る」と「成る」が「生む」の脱落した形態であるとみなし、「生み」の世界観としての『古事記』の神話を強調している(Cf. 服部健二『レーヴィットから京都学派とその「左派」の人間学へ——交渉的人間観の系譜』こぶし書房、2016年、99-103頁)。

(6) 1940–1945 年

この時期から『哲学雑誌』は論文主体の雑誌に変わっていく。雑録・雑報の掲載は見られなくなり、その代わり巻末に最小限の「論文展望」「外国雑誌要覧」「彙報」が載るのみになる。1号あたり100頁前後だった分量も、1940年代に入ると60–70頁前後に減っている。そして、1943年まで年12回刊行を守ってきたが、1944年には8回、1945年には1回のみの刊行となる⁷³。戦時中の用紙不足や人員動員が一因と思われる。

この年代においておそらく最も有名な記事は、出隆の随筆「『哲学』を殺すもの」であろう。これは1941年4月のドイツ軍によるアテネ制圧を受けて書かれたもので、古代ギリシアに仮託しつつ、当時の国内外の情勢に反発した文章である。その中で、出は古代ギリシアにおいて「何がアテネの哲学を殺したのか」と問いを立てた上で、ソクラテスの刑死とともに、哲学と政治が絶縁したと分析している。末尾に書かれた「政治はソクラテスを殺しプラトンの直言を封じるようなアテネのそれであってはならない」という一文は、戦後の出の政治的实践に直結するものである⁷⁴。驚くことに、この随筆は戦時期にもかかわらず、『ギリシアの哲学と政治』（岩波書店、1943年）に収められて出版されている。

教師の世代としては、最晩年の井上哲次郎が「道体論の概観」（全2回）「カントの宗教哲学に関する疑義」「『易』哲学に関する疑義」「東西洋哲学の比較研究」（全2回）を発表しているほか、桑木巖翼が哲学史の論文として「ハマンとカント」を載せるとともに、セレストン・ブーグレ、ミュアヘッド、バルクソンの追悼記事を書いている。また、池上鎌三が自身の个体論につながる論文「全体・部分・个体」を発表している⁷⁵。

この時期の傾向としては、近現代ドイツ哲学の記事が多くを占めている。まず、現象学に関しては、佐竹哲雄が「現象学研究余録」という副題を付けた一連の論文として、「フッセルの哲学専攻の決意とその前後の思想」「数理と論理とに向けられた心理学的分析の性格」「論理学著作の時評——現象学研究余録」「知識学的傾向と形式主義的傾向への批判」「心理学主義の批判の意義、範囲、枢軸」「心理学主義の批判における六つの主題」（全2回）「純粹論理学を通して望み見られた科学論の理念」「『論理的諸研究』第二巻の展望と基底」「表現の構造——意味の志向、意味の充実、対象性」を精力的に発表したほか、「種のイデア的統

⁷³ 1945年1月に695号が刊行されている。内容は、佐竹哲雄「全体の形と法則の探求——文法学・論理学・数学の交流圏（二）」と中村元「ことばの形而上学（上）」の2論文のみであった。

⁷⁴ 出隆は戦後「哲学の無力」を自覚し、マルクス主義へと転じて「戦闘的唯物論」を唱えるようになる。それとともに、「知識人」や「講壇哲学」にも嫌気が差し、日本共産党に入党して市民に開かれた哲学を目指すようになる。定年直前の1951年には東京大学を辞め、無所属で東京都知事選に立候補し落選する。こうした一連の政治的实践は周囲を驚かせたが、出自身はその素地が戦時期からあったと述べている（Cf. 出隆「無力の哲学から」『私はなぜ共産党に入ったか』土橋一吉・岩間正男編、解放社、1949年、1–20頁）。

⁷⁵ 池上鎌三は1956年東京大学教授在任中に急逝したため、池上の个体論は完成されず、遺稿として残されることになる（池上雍春編『池上鎌三遺稿集』私家版、1981年）。

一の開示——経験的抽象からイデア的抽象へ」「全体の形と法則の探求——文法学・論理学・数学の交流圏」(全2回)を書いている。

ドイツ観念論の研究としては、三枝博音「理性に於ける仮象(虚仮)に就いて」(全3回)、山口論助「個と全」「無限」(全2回)、そして原佑の最初期の論文「超越的方法から目的論的世界観へ——カント三批判書の体系的解釈の試み」(全2回)「カントに於ける人間の問題」「批判期哲学の生誕」「カントに於ける哲学の概念」が載っている。

これに加えて、山崎正一「ロックについて」「バークレの場合」「バークレの哲学」(全4回)を発表したほか、西田幾多郎『日本文化の問題』(岩波新書、1940年)の書評を書いている。また、松本厚がアリストテレス『自然学』に関する一連の論文として、「アリストテレス物理(一)」(全3回)「アリストテレスの時間と宇宙」「アリストテレスに於ける運動の形相に就て」を載せている。

そのほか、利根川東洋が日本主義の論文として、「生産の脱落」(全3回)「妥当」「位」「作る神から生む神へ」を発表している。とりわけ「生産の脱落」と「作る神から生む神へ」は、利根川の理論的体系の中で、「生み」の世界観を描く『古事記』の日本神話の優位性を主張するための理論的根拠となる重要な論文である。また、「生産の脱落」は、1938年に『哲学雑誌』に掲載された「成・創造・生産」とともに、『生みの哲学——日本的世界観の論理』に収められることになる。

5. 課題

以上の分析はもちろん大まかなものでしかなく、様々な観点が抜け落ちている。最後に、これからさらに分析を進める上で、特に考慮すべき課題を大きく五つ示しておきたい。

(1) 国内の出版状況との関係

明治末から大正期にかけて、国内の出版状況は大きく変わる。まず、哲学関連の学術雑誌でいえば、京都帝国大学文学部の『芸文』、同哲学科の『哲学研究』、岩波書店の『思潮』(のちに『思想』)が続々と刊行され、空前の学術雑誌ブームとなる。これにより、『哲学雑誌』の地位は相対的に低下することになる。

また、いわゆる名著の刊行が相次ぎ、研究水準が一気に向上することになる。その発端となったのが、1915(大正4)年から刊行が始まった岩波書店の『哲学叢書』である⁷⁶。同叢書は夏目漱石『こころ』とともによく売れ、版を重ねることになる。1916(大正5)年には、朝永三十郎『近世における「我」の自覚史』(東京宝文館)が刊行され、さらに1917(大正

⁷⁶ 同叢書の構成は以下のとおり。第1編『認識論』(紀平正美)、第2編『最近の自然科学』(田辺元)、第3編『哲学概論』(宮本和吉)、第4編『論理学』(速水滉)、第5編『西洋古代中世哲学史』(安倍能成)、第6編『倫理学の根本問題』(阿部次郎)、第7編『宗教哲学』(石原謙)、第8編『精神科学の基本問題』(上野直昭)、第9編『美学』(阿部次郎)、第10編『西洋近世哲学史』(安倍能成)、第11編『現代の哲学』(高橋里美)、第12編『心理学』(高橋穰)。

6) 年には、西田幾多郎『自覚に於ける直観と反省』(岩波書店)、桑木巖翼『カントと現代の哲学』(岩波書店)、左右田喜一郎『経済哲学の諸問題』(佐藤出版部、のちに岩波書店)が出ている。これらの名著は、昭和初期に至るまで学生に広く読まれた⁷⁷。

これに加えて、出版社をめぐる派閥、とりわけケーベル門下の阿部次郎、安倍能成、和辻哲郎らが形成していた「岩波閥」の影響も考慮する必要がある。彼らは岩波書店と密接に結びつき、刊行物の企画に深く関わったほか、『思想』等の学術雑誌で論陣を張り、東大哲学科の主流とは別に強い影響力をもっていた⁷⁸。時には、和辻哲郎と藤岡蔵六のやり取り⁷⁹のように、学界を騒がせる事件を引き起こすこともあった。

(2) 国内外の社会状況との関係

大正期には、桑木巖翼や得能文が黎明会に参加したのに代表されるように、大正デモクラシーと文化主義の下で、多くの論者が論文や随筆を発表している。その一端は『哲学雑誌』においても垣間見ることができる。哲学研究成果がどのように社会に発信され、また社会の情勢がどのように哲学研究の傾向に影響を与えたのか正確に測る必要がある。

昭和前期になると、アカデミズム内外でマルクス主義が流行するようになる。その象徴的な出来事が、1928(昭和3)年における『マルクス=エンゲルス全集』(改造社)の刊行開始と、1932(昭和7)年における唯物論研究会の結成である。当時の哲学科の学生も、研究題目としてはカント研究やヘーゲル研究を掲げつつも、フォイエルバッハ、マルクス、エンゲルスらの著作を読んでいたようである。ところが、『哲学雑誌』においては、不気味なほどその兆候が見られない⁸⁰。これは、経済学部におけるマルクス主義の受容と好対照である。

⁷⁷ 他にも、阿部次郎『三太郎の日記』(東雲堂書店、1914年。のちに岩波書店、1915年)、倉田百三『愛と認識との出発』(岩波書店、1921年)、出隆『哲学以前』(大村書店、1922年)といった随筆が、戦前の旧制高校の学生にとって必読書だった。

⁷⁸ 阿部次郎と和辻哲郎はともに東大哲学科卒であるにもかかわらず、『哲学雑誌』に一切原稿を載せず、岩波書店刊行の『思想』を主な発表の場とした。

⁷⁹ 藤岡蔵六が1921年に刊行したコーエン『純粹認識の論理学』抄訳(岩波書店)に対して、翌1922年に和辻哲郎が同じ岩波書店の『思想』誌面上で訳文の不備を厳しく論難し、絶版を求めたことに端を発して、二人の間で論争が生じた。結果的に同書は絶版となり、内定していた藤岡の東北帝国大学法文学部への就職が取り消される事態にまで発展した。この事件は、当時和辻の就職がまだ決まっていなかったことや、和辻が藤岡の東大哲学科の先輩に当たることなどから、様々な憶測を呼ぶこととなった。一連の騒ぎは、「藤岡蔵六事件」とも呼ばれる。

⁸⁰ これには二つの要因が考えられる。一つは、左傾学生の取り締まりのため、表立っては唯物論の研究ができなかったことである。もう一つは、当時マルクスやエンゲルスの思想が哲学の本領ではないと考えられていた節があることである。戦前の出隆が『マルクス=エンゲルス全集』をもっていたものの、マルクス主義にあまり関心を払わなかったのに対して、戦後に講壇哲学を批判してマルクス主義に傾倒することから考えると、もしかしたら二つ目の要因の方が強かったのかもしれない。

他方、マルクス主義の広まりに対抗して、国民精神文化研究所が設立されるのも 1932 (昭和 7) 年である。同研究所の所員には紀平正美や吉田熊次らが名を連ね、研究所の講習会や機関誌、政府の諮問会議において、日本主義に理論的な基盤を与える役割を担った。『哲学雑誌』もこの動きとは無関係ではなく、ヘーゲル論理学と東洋思想を総合しようとした紀平の一連の論文のほか、紀平と同じく所員であった利根川東洋の重要論文が掲載されている。この事態が一体何を意味するのかは考える必要がある⁸¹。

また、これと合わせて、京都学派の面々が戦後に公職追放に遭ったのに対して、桑木厳翼、伊藤吉之助、出隆、池上鎌三ら、東大哲学科の中心人物たちは、ほとんど無傷でいることができたことも考慮すべきである。

(3) 当時の知的交流との関係

明治中期以降、哲学会以外にも丁酉倫理会、心理学会、京都哲学会等が次々と発足したほか、大学内外で読書会や講演会が活発に開かれるようになる。その一端は、『哲学雑誌』の雑録や彙報でも紹介されている。時には、実際にそうした会に参加した編集委員が聴講者の人数や反応、ハプニング等を克明に報告している場合もある。

刊行物の寄贈を通して、学会の機関誌や学術雑誌どうして論評や紹介をし合う伝統も、明治中期以来一貫して見られる。当時主にどのような刊行物が読まれていたのかを知る手がかりとして、こうした論評や紹介の記事は貴重な資料となる。また、このように寄贈し合った刊行物の中には、大学の学生便覧も含まれていた。実際、特に昭和期の『哲学雑誌』では東大以外の帝国大学、とりわけ京都帝国大学、東北帝国大学、九州帝国大学、京城帝国大学、台北帝国大学の講義題目が紹介されている年度が見られる。これらからは、当時詳細に情報交換をしていた様子が浮かび上がってくる。

さらに、旧制高等学校の教師や同級生を軸とした個人レベルのつながりも重要な役割を果たした。教師としては、特に第一高等学校で哲学を教えた速水滉、ドイツ語を教えた岩元禎、第四高等学校で哲学とドイツ語を教えた西田幾多郎らが、若い学生の進路を決定づける強い影響を与えた。また、卒業後もかつての教師や同級生との書簡のやり取りが多数残っている。同じ高等学校を卒業しても、別々の大学に進学した場合も珍しくないため、こうした知的なつながりは大学の枠を超えて存在していた。

『哲学雑誌』の雑録や彙報等の各種記録、随筆、自伝、回想等を網羅的・横断的に調査することで、当時の知的交流の実態をより高い精度で再現することができると期待される。

(4) 東アジアの西洋哲学受容との関係

「哲学」「理念」「表象」をはじめとする明治期の翻訳語の多くが、中国や台湾から日本に

⁸¹ 『哲学雑誌』には 1942 (昭和 17) 年度までの哲学科関連の講義題目が掲載されているが、年度によって神道学科の講義が含まれていたりいなかったりする。『哲学雑誌』の編集委員の間でも神道学科の位置づけをめぐる見解が分かれていた可能性がある。

留学した学生の活動を通して、中国語圏に移植されたことが知られている。こうした留学生は少数ながら大学の講義にも出席した⁸²ほか、日本で書かれた研究書を中国語に翻訳して出版することで、中国語圏における研究水準を引き上げる役割を担った。代表的な例としては、桑木巖翼『哲学概論』（東京専門学校出版部、1900年）が『哲學概論』（廣東高等師範學校學生貿易部、1919年）として中国広東省で出版されたほか、『カントと現代の哲学』（岩波書店、1917年）、『科学に於ける哲学的方法』（岩波書店、1925年）がそれぞれ『康德與現代哲學』（商務印書館、1935年）、『科學中之哲學方法』（商務印書館、1931年）として台湾で出版されている。それ以外にも、朝永三十郎『近世における「我」の自覚史』（東京宝文館、1916年）を訳した『近代“我”之自覺史』（商務印書館、1924年）等が見られる。

(5) 旧制高等学校の教育制度との関連

高等教育制度、とりわけ「ナンバーズクール」と呼ばれた旧制高等学校の役割も押さえておかなければならない。旧制高等学校の前身となったのは、明治中期に設立された旧制高等中学校である。西田幾多郎や鈴木大拙らの世代が専門学校在学中に旧制高等中学校に切り替わり、桑木巖翼の世代は旧制高等中学校に入学している。その少し下の安倍能成の世代は、旧制高等学校に入学した。

旧制高等中学校および旧制高等学校の重要な点は、そのカリキュラムにある。これらの学校が設立される前は、江戸期の名残りで優秀な子供は各地の私塾で学んだが、学校の設立後は画一的なカリキュラムが与えられ、それを突破しないと帝国大学には入学できなかった。

次頁に掲げたのは、文部省が1886（明治19）年に通達した旧制高等中学校のカリキュラムと、1919（大正8）年に改定した旧制高等学校のカリキュラムである。どちらも文科大学・文学部進学者の場合を示した。単位数は週の授業数に相当する。これを見ると、外国語の授業の割合が全体の3～4割に達することが分かる。また、漢学にかろうじて触れる機会となるのは、「国語及漢文」の科目であったが、これは外国語の半分以下の授業時間しか割かれていない。こうしたカリキュラムの下で育った学生にとっては、井上哲次郎や三宅雪嶺らの世代が東洋哲学を重視する理由がよく分からなかった可能性がある。大正期以降、西洋哲学の研究者が儒教や仏教に言及することが減っていくこととも関連があるように思われる。

⁸² 当時の留学生の様子は、いくつかの随筆や回想を通して窺い知ることができる。例えば、ライプニッツやプルタルコスの翻訳で知られる河野与一は、学生時代に受けた桑木巖翼の授業で中国（または台湾）からの留学生を見かけている。「まさか『三四郎』の与次郎を気取ったわけではないが、夏休を少し延ばして学校へ出て見ると、今度もやっぱり講義が始まっていた。文科へ行った高等学校同期の連中に顔見知りのものもいたけれども、一年落第したと同然な私が出る教室には見当らないから、ノートを貸して貰う相手もなく、桑木先生の時間に偶ま隣同士坐在一起合わせた大人しそうな学生に頼んで借りて帰ったら、それが中国留学生だった。日本語でちゃんと書いているし、参考書目の処々には「佳本」などと洒落た評語が上手な字で記してあった。たしか范寿康君と云ったと思う」（原二郎編『新編 学問の曲り角』岩波文庫、2000年、227-228頁）。

▼ 高等中学校ノ学科及其程度（明治 19 年 7 月 1 日文部省令第 16 号）

| 科目名 | 第一年 | | 第二年 | |
|-------|-----|-------|-----|-------|
| | 单位数 | 割合 | 单位数 | 割合 |
| 国語及漢文 | 3 | 10.0% | 3 | 11.5% |
| 第一外国語 | 4 | 13.3% | 4 | 15.4% |
| 第二外国語 | 5 | 16.7% | 5 | 19.2% |
| 羅甸語 | 2 | 6.7% | 2 | 7.7% |
| 地理 | | 0.0% | | 0.0% |
| 歴史 | 3 | 10.0% | | 0.0% |
| 数学 | 3 | 10.0% | | 0.0% |
| 動物及植物 | | 0.0% | | 0.0% |
| 地質及鉱物 | 2 | 6.7% | | 0.0% |
| 物理 | 5 | 16.7% | | 0.0% |
| 化学 | | 0.0% | 3 | 11.5% |
| 天文 | | 0.0% | 1 | 3.8% |
| 理財学 | | 0.0% | 2 | 7.7% |
| 哲学 | | 0.0% | 3 | 11.5% |
| 図画 | | 0.0% | | 0.0% |
| 力学 | | 0.0% | | 0.0% |
| 測量 | | 0.0% | | 0.0% |
| 体操 | 3 | 10.0% | 3 | 11.5% |
| 計 | 30 | | 26 | |

▼ 高等学校規程（大正 8 年 3 月 29 日文部省令第 8 号）

| 科目名 | 第一学年 | | 第二学年 | | 第三学年 | |
|-------|------|-------|------|-------|------|-------|
| | 单位数 | 割合 | 单位数 | 割合 | 单位数 | 割合 |
| 修身 | 1 | 3.0% | 1 | 3.0% | 1 | 3.1% |
| 国語及漢文 | 6 | 18.2% | 5 | 15.2% | 5 | 15.6% |
| 第一外国語 | 9 | 27.3% | 8 | 24.2% | 8 | 25.0% |
| 第二外国語 | 4 | 12.1% | 4 | 12.1% | 4 | 12.5% |
| 歴史 | 3 | 9.1% | 5 | 15.2% | 4 | 12.5% |
| 地理 | 2 | 6.1% | | 0.0% | | 0.0% |
| 哲学概説 | | 0.0% | | 0.0% | 3 | 9.4% |
| 心理及論理 | | 0.0% | 2 | 6.1% | 2 | 6.3% |
| 法制及經濟 | | 0.0% | 2 | 6.1% | 2 | 6.3% |
| 数学 | 3 | 9.1% | | 0.0% | | 0.0% |
| 自然科学 | 2 | 6.1% | 3 | 9.1% | | 0.0% |
| 体操 | 3 | 9.1% | 3 | 9.1% | 3 | 9.4% |
| 計 | 33 | | 33 | | 32 | |

6. 結び

『哲学雑誌』の分析は、近代日本のアカデミズムの一つの側面を浮かび上がらせることになる。それは、明治期以降の日本において、なぜ人文諸科学が研究され始め、なぜ現在の形へと至ったのかを解明する手がかりになるはずである。そうした考察は、決して単なる歴史趣味に属するものではない。むしろ現在のわれわれの学問知を成り立たせている歴史的・地理的な諸条件を改めて自覚してその限界を画定すること、そしてそれを乗り越えて思考を進めること、その両方にとって必要不可欠な作業である。本稿がこの作業の上で一つのたたき台になれば幸いである。